



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	苫前町地域通貨第二次流通実験報告：アンケート・インタビュー調査を中心に
Author(s)	西部, 忠; 草郷, 孝好; 栗田, 健一 他
Citation	Discussion Paper, Series B, 75, 1-59
Issue Date	2008-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34619
Type	departmental bulletin paper
File Information	DPB75.pdf



Discussion Paper, Series B, No. 2008-75

苫前町地域通貨第二次流通実験報告
—アンケート・インタビュー調査を中心に—

西部忠, 草郷孝好, 栗田健一,
吉田昌幸, 山本堅一, 宮崎義久

北海道大学大学院 経済学研究科
2008 年 8 月

北海道大学大学院経済学研究科
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目

Discussion Paper, Series B, No.2008-75

苫前町地域通貨第二次流通実験報告
—アンケート・インタビュー調査を中心に—

西部忠，草郷孝好，栗田健一，吉田昌幸，山本堅一，宮崎義久

2008 年 8 月

【目次】

I	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	2～4
II	アンケート集計結果	
1	第3回アンケートの質問項目とその回答・・・・・・・・	5～6
2	第3回アンケート結果の分析・・・・・・・・	7～8
	資料・・・・・・・・・・・・・・・・	9～25
III	インタビュー・グループディスカッション報告	
1	インタビュー調査	
1-1	第一回インタビュー・・・・・・・・	25～29
1-2	第二回インタビュー・・・・・・・・	30～51
2	地域通貨に関するワークショップ	
2-1	概要・・・・・・・・	52
2-2	進行表・・・・・・・・	52
2-3	グループディスカッション発表内容・・・・・・・・	53～57
IV	おわりに・・・・・・・・	58～59

I はじめに

本稿は、2005年8月20日から2006年1月20日までおよそ5ヶ月の期間に実施された苫前町地域通貨第二次流通実験の調査結果について報告するものである。

はじめに、本地域通貨流通実験が行われるに至った経緯を説明する。西部は、2003年度、北海道商工会連合会から地域通貨調査事業の委嘱を受け、調査を行い、その結果を『地域通貨のすすめ』と題する報告書にまとめた。そこで強調したのは以下の諸点である。

- ◆地域通貨は、地域経済を活性化するための「経済メディア」であると同時に、地域コミュニティの共同性と相互扶助を補強するための「社会文化メディア」でもある。
- ◆各地域通貨がこれら両側面をどれだけを含むかは、参加者や地域の個性に依存して異なるが、どちらかに余り偏らずにバランスを保つことが、経済振興効果と公共的コミュニティ形成効果をともに達成するための鍵である。
- ◆ここ数年の間に、地方の自治体・商工会発行の地域商品券を域内で複数回流通させて地域通貨として活用する試みや、ポイントカードや電子マネーなどの新技術を地域通貨へ応用する試みなど、地域通貨に新展開が見られる。
- ◆地域通貨を導入する際、地域の現状や課題、地域通貨のシステムや仕組み、参加する個人や団体、運営組織体制について十分に討議し、住民の広い理解を得るよう努める必要がある。

その上で、西部は、経済的側面とコミュニティ的側面の両輪をバランスよく保つために有効な循環スキームを具体的に提唱した。それは、地域住民間のボランティアや相互扶助などの非市場的取引を媒介する地域通貨の小循環（小さな三角形）を、商工業者、自治体、各種団体、NPOによる市場的取引を媒介する大循環（大きな三角形）が包み込む「ダブル・トライアングル」方式であった。これは、その当時地域通貨特区で行われたスキームに似ていた。いずれも地域通貨の現状の課題を克服するために案出したもので、相互に類似するのは当然である。

北海道商工会連合会は、この「ダブル・トライアングル」方式の地域通貨モデルによる流通実験事業を行うことを決定し、道内の商工会から実施団体を公募した。応募してきたいくつかの商工会の中から苫前郡苫前町商工会が選抜された。北海道商工会連合会の地域通貨実践モデル事業として苫前町地域通貨の流通実験が開始されることとなった。西部は、商工会連合会から、アドバイザーとして地域通貨の設計と運営に関する助言、および、フイジビリティ・スタディーの実施を委託されることとなった。

地域通貨は世界では1980年代以降、日本では2000年代以降急速に普及してきた。だが、これまで地域通貨の詳細な実態をデータの的に明らかにし、実証的な分析・評価を行った研究は国内外でほとんど見られない。「実験あれども検証なし」というのが地域通貨の実態な

のである。だが、既に見たように、現状の地域通貨にはいくつかの大きな課題も残されていることも確かである。今後、地域通貨の意義と限界を客観的に評価し、それに基づいて新たな制度設計、運営手法、活用方法等を提言していくことが求められると予想される。そのために、地域通貨の特性や有効性を定性的・定量的に調査研究していく必要がある。少なくとも域内経済活性化効果は定量的に分析できると考えられるので、それに関しては、実証的な研究結果を提示することで、社会的評価をあおぐべきであろう。私たちは、今回二つの研究手法を駆使して、地域通貨が実施される地域の特徴や背景を記述し、地域通貨の経済的効果を評価するよう試みようと考えた。

一つは、インタビュー、アンケートの結果を利用する定性的分析である。インタビューでは、その対象者が表現しようとする口述内容から、地域の現状や問題、地域住民の意識のあり方を理解しようとした。他方、アンケートでは得られた回答結果を集計し、統計的手法をも用いて有意な命題を導きだそうとした。

もう一つの研究手法とは、地域通貨の効果を評価するために、ネットワーク理論を応用したことである。ネットワーク理論は新しい理論として近年注目されており、友人・知人関係などの人的ネットワーク、財閥や企業グループなどの企業間ネットワーク、あるいは、インターネットのようなサーバー間ネットワークの分析に応用されている。金融システムに関しては、銀行間ネットワークの分析が行われているが、ネットワーク理論が地域通貨（もしくは通貨一般）の流通ネットワークの分析に適用された研究はまだほとんどない。

私たちは、まず、地域通貨の流通ネットワークを分析するためのデータを取得する方法をどうするかに苦心した。最も効率的かつ正確にデータを取得する方法として、流通実験への電子マネーの導入が検討された。導入費用はある程度押さえられるとはいえ、店主や住民にコンピュータの扱いに慣れていない高齢者が多いという事情を考慮して、この方法は諦めざるを得なかった。結局、地域通貨の紙券裏に利用者が氏名、住所、年月日、用途を記入する記載欄を5人分、最後に地域通貨を交換所で換金する特定事業者の記載欄を設け、利用者が各自で記入してもらう方法を採用することにした。そのデータに基づいて地域通貨の流通経路や回転数を記録しようと考えた。この紙券データをすべてスプレッドシート上の入力伝票に手入力し、そのデータから主体間の地域通貨流通行列をコンピュータ・プログラムにより自動的に構成する。最後に、この流通行列を用いて、流通ネットワークの構造特性を定量的に分析することとした。

日本銀行券の貨幣流通速度（名目 $GDP/M2+CD$ ）は低下し続け、2001年以降0.8を下回る状況であるのに対して、苫前町地域通貨の貨幣流通速度はそれを遥かに上回る値を出した。流通速度は第一回実験では5を上回り、今回の第二回でもやや下がったとはいえ、高水準のものである。これは、これまで言われてきたように、国家通貨との比較において、地域通貨が高い経済活性化効果を持っていることを十分裏付けるものである。

私たちは、第一回の苫前町地域通貨流通実験について『苫前町地域通貨流通実験に関する報告書』（西部忠編著、草郷孝好、穂積一平、吉地望、吉田昌幸、栗田健一、山本堅一、

吉井哲著，北海道商工会連合会，2005 年 3 月）において報告し，また，第二回の実験についても『苫前町地域通貨流通実験報告書』（西部忠編著，草郷孝好，穂積一平，吉地望，吉田昌幸，栗田健一，山本堅一，吉井哲著，苫前町商工会，2006 年 3 月）で報告しているが，これは運営母体である苫前町商工会向けに実験直後に出されたものであるため，インタビューやアンケートのデータ利用が十分でなく，その後の資料整理が望まれていた。

苫前町の特徴，現状，課題や苫前町地域通貨のねらいや仕組みについては主に前者の報告書を参照していただきたい。地域通貨の流通の仕組みについては一回目の実験に比べて二点のみ異なる。一つは，アンケート調査で希望が多かった，100P の小額流通を開始したこと，もう一つは，農協(JA)やコンビニエンスストア（セイコーマート）でも地域通貨を使えるようにしたこと，（ただし，受取のみで，2P 券の発行はしない）である。

本稿は，とりわけ実験後の 2006 年 2 月に行った 3 回目のアンケート調査（町民から地区的なバランスをとり 400 人を抽出して配布，後日同封の返信用封筒にて回収，回収率は 37%）と，2005 年 9 月，2006 年 2 月の 2 回にわたって行われたインタビュー調査の結果に焦点を絞ったものである。これは，上で挙げた第二回目実験の報告書を基に，より詳細な結果を報告するものであり，今後の私たちの研究にとって基礎データとして位置づけられるものである。

II アンケート集計結果

1. 第3回アンケートの質問項目とその回答

(a)地域通貨についての認識

苫前町地域通貨を知っているかという問いに「はい」と答えたのは88%であり、第一回実験の最後のアンケートによる82%よりやや高い結果となった。

(b)地域通貨の利用状況

地域通貨を実際に使ったと答えたのは43%で、55%は使わなかったと答えている。地域通貨が利用された商品・サービスは「日用品・衣料・食料品」が51人、「宿泊・飲食代」が6人、「新聞・雑誌・電話代」、「在宅介護サービス・掃除」、「パソコンや勉強の指導」、「留守番」がそれぞれ1人であった。

地域通貨の導入にどのようなことを望むかという問いに対しては、「地域内での流通が活発になり経済が活性化する」が39人と最も多く、「手持ちの現金が無くてよい」が20人、「福祉や医療等にも使える」が18人、「NPO・市民活動の活発化につながる」が9人、「店員との会話が弾む」、「手軽にアルバイト収入が得られる」がそれぞれ7人、「気軽に掃除など雑用を頼める」が6人、「自然保護に役立つ」が4人であった。

地域通貨を渡した、あるいは受け取った時の感想としては、「正直、地域通貨を使うのは、わずらわしいと感じた」が24人、「地域通貨を使えるいろいろな商品やサービスがたくさん欲しいと感じた」が18人、「何かこれまでとは違う人と人との関わり方を発見したような気持ちがした」が7人、「もっと地域通貨を使って何か人に頼んでもいいなと思った」が5人、「もっと何かしてあげて、地域通貨を受け取りたいと思った」が3人であった。地域通貨の利用をわずらわしいと感じた人にその理由を尋ねてみると、「面倒くさい」が一番多く、他には「使用できる店舗・商品が限られているから」、「よく理解していない」等の理由が挙げられていた。

(c)商店街について

地元商店街で利用頻度が高いのは、食品、灯油、酒類、薬、理容・美容、外飲食などで、化粧品は利用頻度が低かった。また同時に、羽幌や留萌での利用頻度も高く、食料品、日用雑貨、医療サービスでは特にその傾向が見られる。

また、以前（5年前）に比べての商店街の利用頻度の変化について尋ねたところ、「以前よりも利用している」は4%、「ほとんど変わらない」は63%、「利用は減っている」は17%だった。

さらに、地域通貨導入による商店街の変化を品揃え、対応、売出しの3つにわけて尋ねたところ、3項目ともほとんどの人が「変わらない」と答えている。そして地域通貨流通実

験を行っている 1, 2 年の間の商店街の活気に変化が見られるかどうかの問いには、「以前と変わらない」と答えた人が 71%で、「活気がなくなった」が 17%、「活気が出た」と答えたのは 1%だった。

苫前町だけではなく日本全体の傾向としての商店街衰退について、「何か対策を立てなければならないと思う」と答えたのが 40%、「衰退するのは悲しいが、しょうがないと思う」は 46%、「衰退しても構わない」は 3%であり、各地での大型店舗の増加については、「品揃えがあるし、安いので当然だと思う」が 72%、「地元の商店街が衰退するかもしれないのであまり良くない」が 19%、「関心がない」は 2%だった。また、苫前町に大型店が出店してほしいと思うかという問いには、「はい」が 35%、「いいえ」が 51%だった。

(d) 苫前町の生活について

苫前町での現在の生活について、それぞれの項目から満足度を尋ねてみると、満足度が高いのは、町内会活動、防災・防犯、福祉ボランティアの分野で、逆に不満足度が特に高いのは、公共交通整備、商店街活動、収入・所得、雇用の分野である。

知り合いに何かをしてもらった時のお返しの形態として望ましいのを尋ねたところ、「お返しの贈り物をする」が 60 人、「商品券」が 45 人、「現金」が 13 人、「地域通貨券」が 12 人で、相手が見ず知らずの人の場合だと、「お返しの贈り物をする」が 57 人、「現金」が 27 人、「商品券」が 21 人、「地域通貨券」が 9 人となった。

近所付き合いについて、付き合いの程度としては「互いに相談したり、日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力し合っている」が 42 人、「日常的に立ち話をする程度の付き合いはしている」が 66 人、「あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない」が 15 人で、付き合いしている人の数は、「だいたい 20 人以上」が 42 人、「だいたい 5～19 人」が 65 人、「だいたい 4 人以下」が 14 人だった。付き合いの頻度としては、「日常的にある（毎日～週に数回程度）」が 33 人、「ある程度頻繁にある（週に 1 回～数回程度）」が 52 人、「時々ある（月に 1 回～年に数回程度）」が 44 人、「めったにない（年に 1 回～数年に 1 回程度）」、「全くない（もしくは友人・知人はいない）」はともに 3 人という結果だった。このような付き合い関係がある中、いざという時に頼りになるのは、「近所の人々」が 44 人、「家族」が 100 人、「親戚」が 34 人、「友人・知人」が 33 人で、「インターネット上の相談相手」が 1 人だった。

また、苫前町で地域通貨流通実験をするようになってから、人と人とのつながりに変化を感じているかという問いに、「強く感じる」と答えたのは 1 人、「少しだけ感じる」は 21 人、「感じない」は 100 人だった。

2. 第3回アンケート結果の分析

(a)基礎データ(Q38-Q52)

2006年1月31日現在の苫前町人口4122名の男女比率は、男性1939名(47%)、女性2183名(53%)である。今アンケートの有効回答数147名の内、男性が75名(51%)、女性が69名(47%)、無回答3名(2%)であった。苫前町の男女比率を考えると、今アンケートの回答者は過去2回のアンケートに比べて苫前町の実際の男女比率に近くなっているといえる。60才以上を高齢者と考えるとその割合は50%近くを占める。

(b)地域通貨の利用状況(Q1-Q9)

地域通貨の利用状況について、まず、地域通貨を認知している人(129名)のうち、43%にあたる54名が実際に地域通貨を利用したと回答している。地域通貨の利用金額であるが、500Pの活用が大半であった。

地域通貨を利用した商品やサービスの内容については、大多数が日用品・衣料・食料品などの商品購入に利用し、それ以外のサービスにはあまり活用されてはいないことがわかる。ところが、Q6で、町の中の助け合い活動に対しての地域通貨の活用の実際について質問したところ、人の手助けの項目の上位にあげられている項目(葬儀のお手伝い、雪かき、車での送迎、買い物の手伝い、育児・家事など)のうち、車の送迎を除く項目については、地域通貨を活用していた。その割合も、葬儀のお手伝いでは、手助けをしたと回答されたケースが41回、手助けされたケースが17回あるが、そのうち、5回に地域通貨のやり取りがなされていた。同様にして、雪かき、買い物の手伝いなどにも1割程度のケースについて地域通貨が活用されていたことは、商店における活用のみならず、非市場的取引への活用の可能性を示すものとして興味深い。

さらに、地域通貨を利用して感じたことを質問したところ、「正直、地域通貨を使うのは、わずらわしいと感じた」との回答が24件と一番多かったものの、「地域通貨を使えるいろいろな商品やサービスがたくさん欲しいと感じた」に18件、「何かこれまでとは違う人と人とのかかわり方を発見したような気持ちがあった」に7件、「もっと地域通貨を使って何か人に頼んでもいいなと思った」に5件、「もっと何かしてあげて、地域通貨を受け取りたいと思った」に3件と、肯定的にとらえているのは30件にのぼり、将来の地域通貨利用を期待する前向きな感想が多く寄せられた点も大変重要な結果であるといえる。

Q8で、「苫前町で地域通貨が流通するようになってから、人と人とのつながりには何か変化があると感じていますか。」を尋ねたところ、7割近くの人が、特段の変化を感じなかったと回答した一方で、約15%、つまり、6人に1人近くの町民が人と人とのつながりに少しだけ変化を感じると回答した。わずかな実験期間に過ぎず、また、地域通貨の浸透度についても、十分なものがあるといえなかった実験段階でありながら、このような意識変化を起こしつつあるのは、地域通貨が苫前町の人と人とのつながりを変化させうる可能性を

感じさせる結果である。

(c)商店街における地域通貨の利用状況(Q15-Q27)

地域通貨を商店街の買い物に利用したと回答した人は、63 人であった。商店街における地域通貨流通の金額は 500P, 100P とともに活用されていたが、500P の方がより多く活用されていた。また、地域通貨で購入された商品は、食料品が 38 件と多数あり、酒類(12 件)、書籍・文具(12 件)、衣料品(7 件)、電化製品(6 件)、化粧品(5 件)、外飲食(5 件)と続いていた。また、実際に利用された商店は、食料品店、農協(A-Coop)、酒屋、書籍・文具店、宿泊温泉施設(「ふわっと」)、薬局などであった。一回目の実験時には地域通貨利用を認めていなかった A-Coop や「ふわっと」での温泉利用がある程度見られた点は商店街における地域通貨の活用範囲拡大の成果の一つといえよう。これは、町民の購買行動に連動させて地域通貨の活用範囲拡大を検討することの重要性を示唆している。

地域通貨実験期間中における商店街の利用頻度、商店の対応や活気等の変化について尋ねた質問への回答からは、あまり大きな変化はないと見られていることが伺える。地域通貨実験の期間が限定されているため、地域通貨の商店や町民への浸透はそれほど進んでいないようである。商店街の変化を把握するためには、もう少し長期間の流通実験による検証が必要である。

なお、苫前町に限らず日本全体の商店街の衰退という一般的傾向については、「衰退するのは悲しいが、しょうがないと思う」が 44%と最も多いが、「何か対策を立てなければならぬと思う」も 38%とそれに匹敵するほど高い。「衰退しても構わない、関心がない」と答えたのはわずか 3%である。一方で、商店街衰退の一因とも思われる大型店舗の進出については「品揃えがあるし、安いので当然だと思う」が 67%と多く、「地元の商店街が衰退するかもしれないのであまり良くない」と答えたのは 18%にとどまった。ただし、この結果は、町民が地元の商店街が衰退しても構わないと考えているわけではないということを示している。これは、ひとつ前の質問からも明らかである。さらに興味深いのは、苫前町に大型店が出店してほしいと思うかどうかという質問に対して、「はい」が 35%、「いいえ」が 51%と回答しているという結果である。大型店の進出という全国的な傾向を当然と見る人が多い一方で、地元には来てほしいとは思わないという回答をしている人が半数いるということは、他地域の大型店に自動車で行けるので構わないという考えからだけでなく、地元商店街のことを慮った結果なのかもしれない。

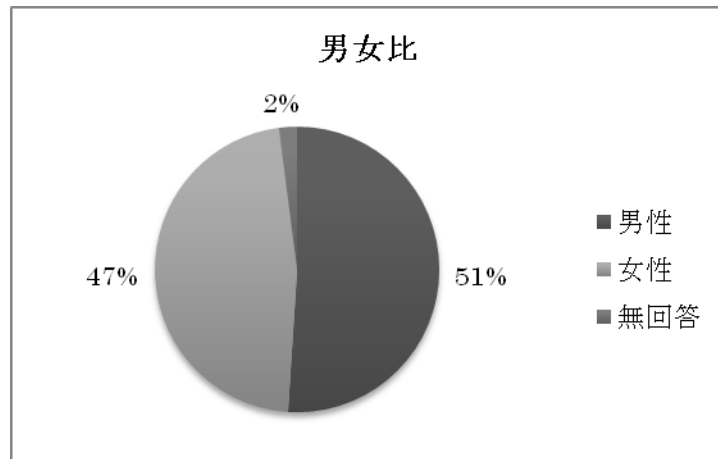
【資料】

○回答者の構成

Q39. 性別

男性	75(51%)
女性	69(47%)
無回答	3(2%)
計	147

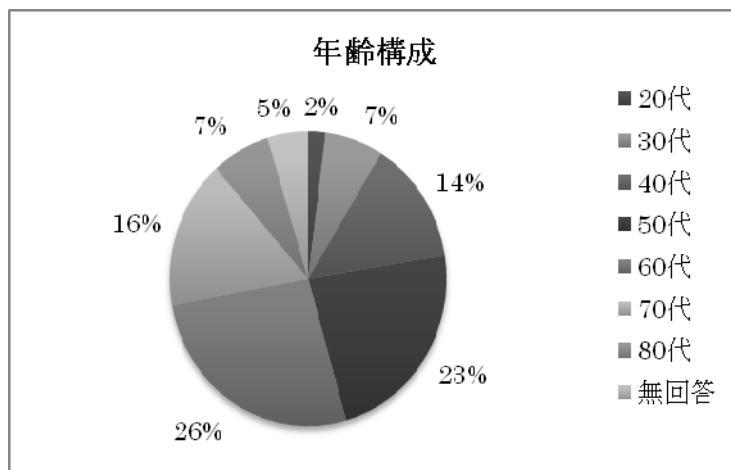
(単位：人)



Q40. 年齢

20代	3(2%)
30代	10(7%)
40代	20(14%)
50代	34(23%)
60代	39(26%)
70代	24(15%)
80代	10(7%)
無回答	7(5%)
計	147

(単位：人)



Q41. 居住地区

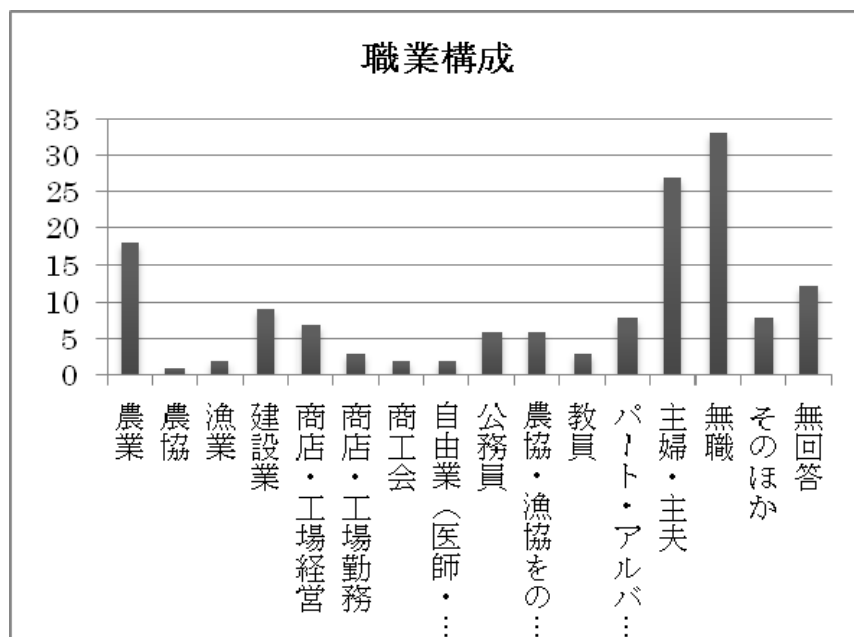
古丹別	84	苫前	25	旭	6	長島	5
港	5	三溪	4	岩見	3	力昼	3
昭和	3	興津	2	香川	2	栄浜	1
豊浦	1	九重	1	東川	1	無回答	1
計	147						

(単位：人)

Q44. あなたの主な職業は何ですか。

農業	18
農協	1
漁業	2
建設業	9
商店・工場経営	7
商店・工場勤務	3
商工会	2
自由業(医師・弁護士など)	2
公務員	6
農協・漁協をのぞく団体職員	6
教員	3
パート・アルバイト	8
主婦・主夫	27
無職	33
そのほか	8
無回答	12
計	147

(単位：人)

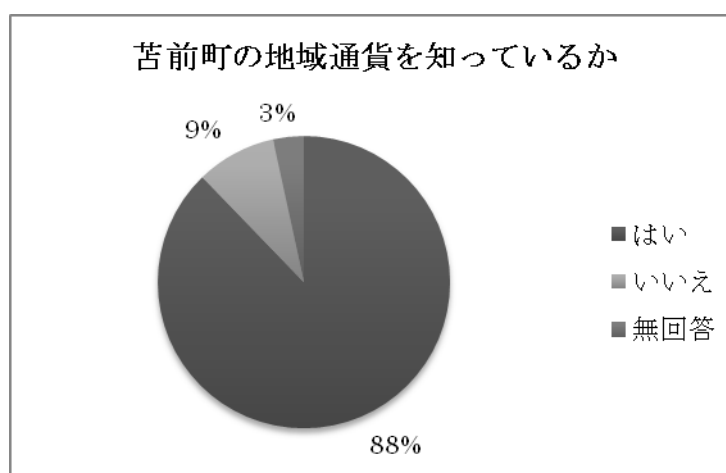


○地域通貨について

Q1. 苫前町の地域通貨を知っていますか。

はい	129(88%)
いいえ	13(9%)
無回答	5(3%)
計	147

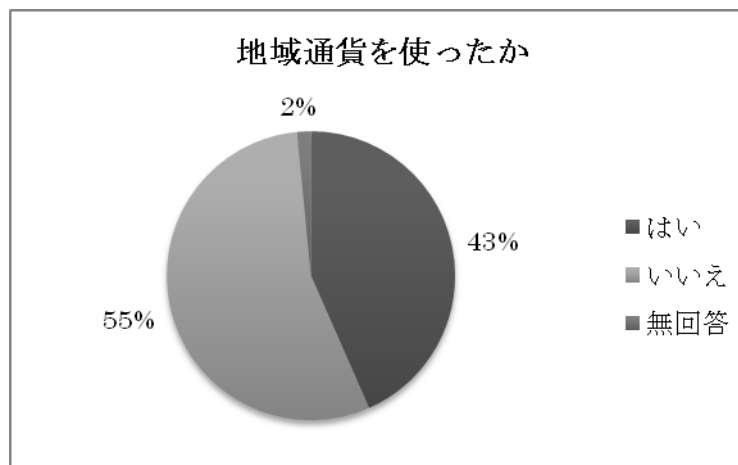
(単位：人)



Q2. (Q1 ではいと答えた方のみ) また、地域通貨を実際に使いましたか。

はい	56(43%)
いいえ	71(55%)
無回答	2(2%)
計	129

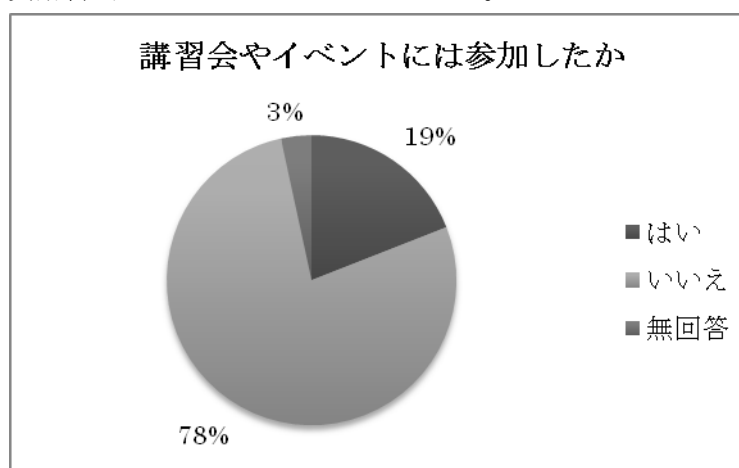
(単位：人)



Q3. 苫前町で行われた地域通貨講習会やイベントに参加しましたか。

はい	28(19%)
いいえ	114(78%)
無回答	5(3%)
計	147

(単位：人)



Q4. どのような商品やサービスに地域通貨を利用しましたか。

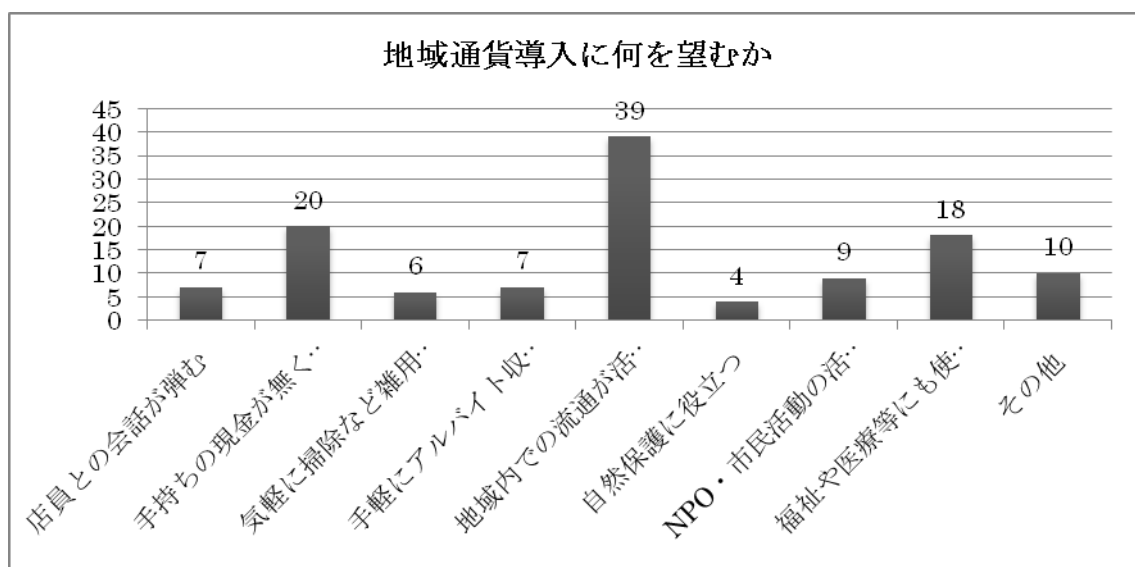
日用品・衣料・食料品	51	新聞・雑誌・電話代	1	バス・タクシー代	0
理髪・理容・エステ代	0	宿泊・飲食代	6	在宅介護サービス・掃除	1
農作業の手伝い	0	パソコンや勉強の指導	1	留守番	1
街の警備	0	自宅栽培野菜の交換	0	不用品・中古品の交換	0
ペットの世話	0	話し相手	0	その他	3

(単位：人)

Q5. 地域通貨導入にどのようなことを望みますか。

店員との会話が弾む	7	手持ちの現金が無くてよい	20
気軽に掃除など雑用を頼める	6	手軽にアルバイト収入が得られる	7
地域内での流通が活発になり経済が活性化する	39	自然保護に役立つ	4
NPO・市民活動の活発化につながる	9	福祉や医療等にも使える	18
その他	10		

(単位：人)



Q8. 地域通貨を渡した（受け取った）時、どのように感じましたか。

正直、地域通貨を使うのは、わずらわしいと感じた。	24
地域通貨を使えるいろいろな商品やサービスがたくさん欲しいと感じた。	18
何かこれまでとは違う人と人との関わり方を発見したような気持ちでした。	7
もっと地域通貨を使って何か人に頼んでもいいなと思った。	5
もっと何かしてあげて、地域通貨を受け取りたいと思った。	3
その他	3

(単位：人)

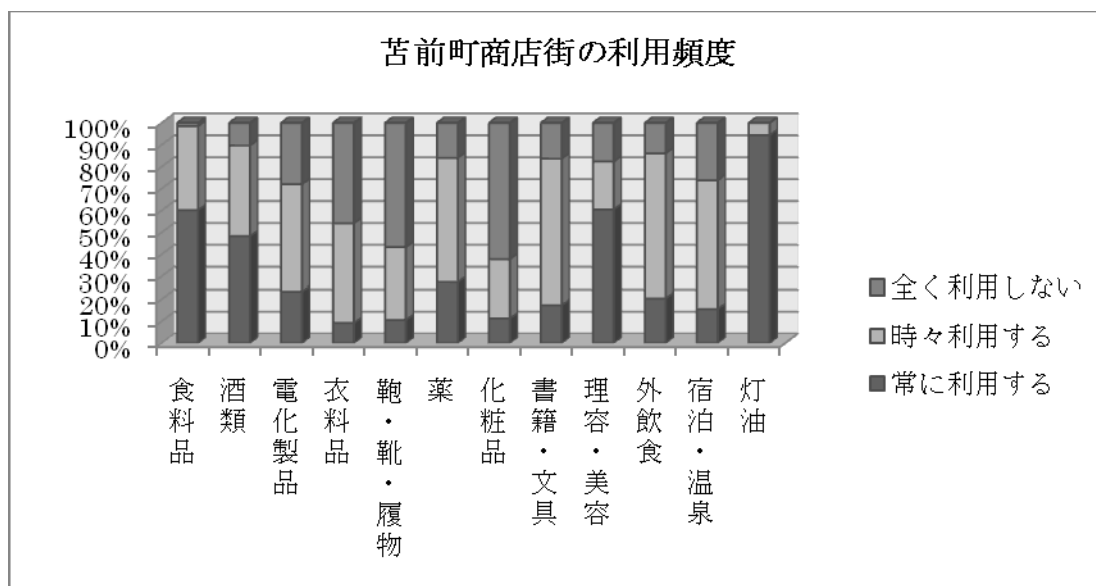
Q9. わずらわしいと感じた方に伺います。なぜそう感じたのでしょうか。（一例）

- ・面倒くさい。
- ・よく理解できていない。
- ・使用できる店、品物が限られている。

○商店街について

Q15. 苫前町の商店街をどれほど利用していますか。

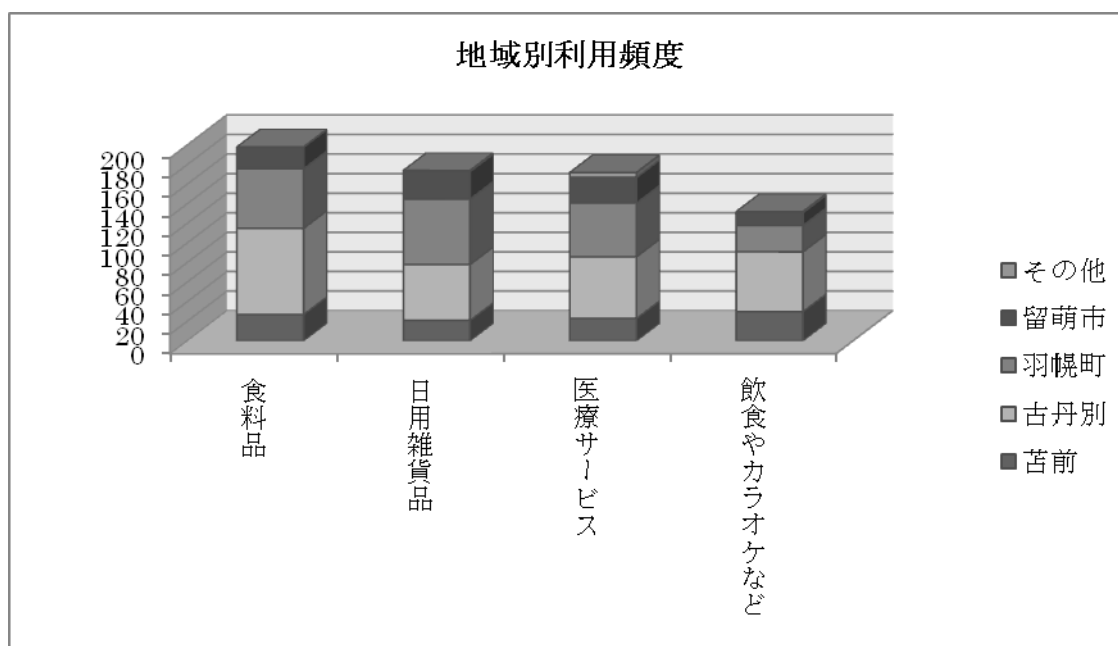
	常に利用する	時々利用する	全く利用しない
食料品	60%	38%	2%
酒類	48%	41%	10%
電化製品	23%	49%	28%
衣料品	9%	45%	46%
靴・靴・履物	11%	33%	57%
薬	27%	57%	16%
化粧品	11%	27%	62%
書籍・文具	17%	66%	16%
理容・美容	61%	22%	18%
外飲食	20%	66%	14%
宿泊・温泉	16%	58%	26%
灯油	94%	6%	0%



Q16. 以下のサービスや商品をどこで購入しますか。

	苫前	古丹別	羽幌町	留萌市	その他
食料品	27	88	61	22	0
日用雑貨品	21	57	67	28	1
医療サービス	23	63	55	26	5
飲食やカラオケなど	30	61	27	13	1

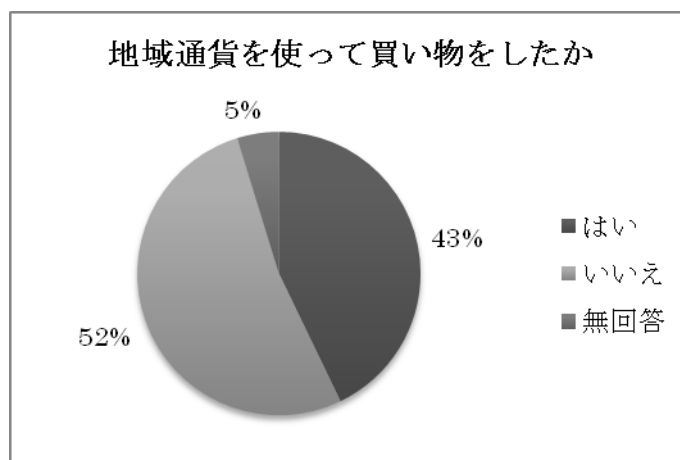
(単位：人)



Q17. 地域通貨を使って何か買い物をしましたか。

はい	63(43%)
いいえ	77(52%)
無回答	7(5%)
計	147

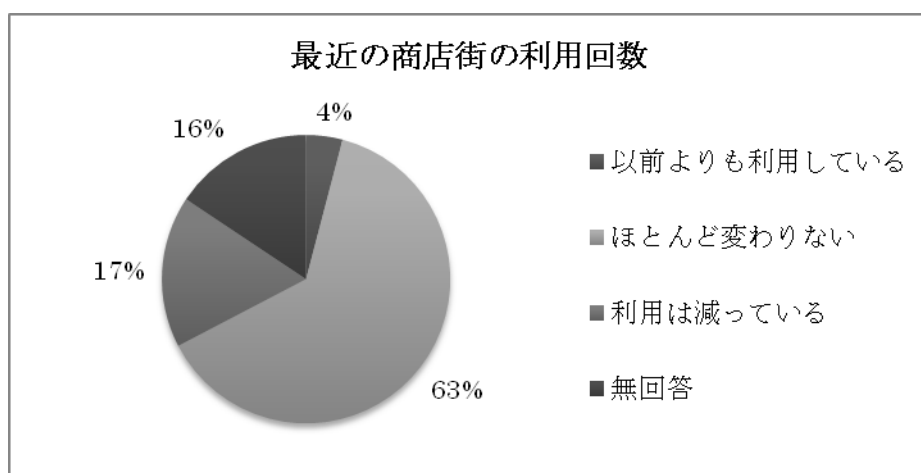
(単位：人)



Q21.最近の商店街の利用回数は、以前（5年前）に比べて何か変わりましたか。

以前よりも利用している	6(4%)
ほとんど変わらない	93(63%)
利用は減っている	25(17%)
無回答	23(16%)
計	147

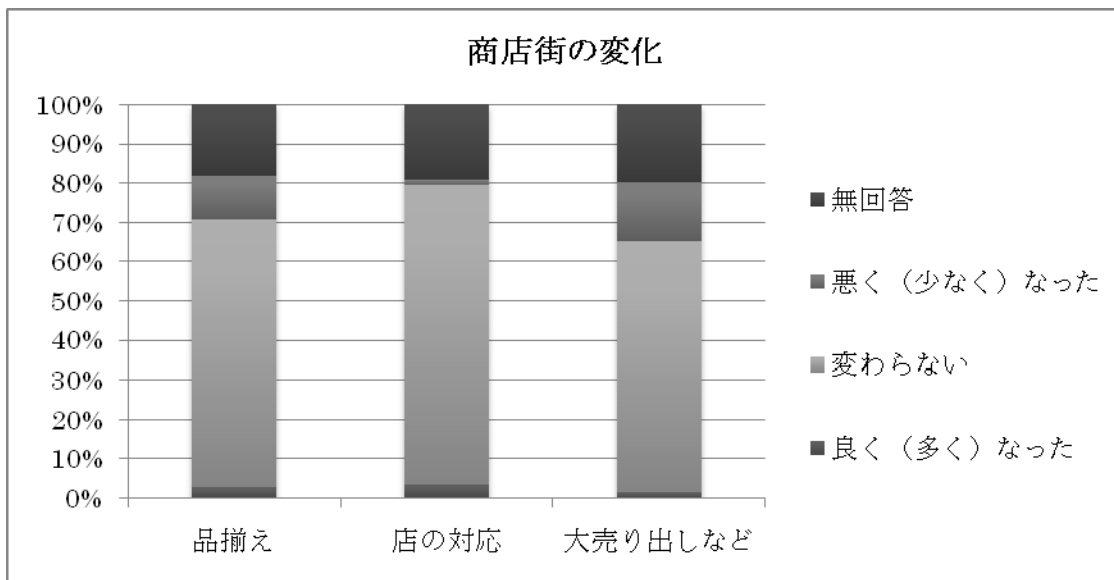
(単位：人)



Q22.地域通貨流通実験を行ったここ1,2年の間に、商店街の中に何か変化はありましたか。

	良くなった	変わらない	悪くなった	無回答	計
品揃え	4(3%)	100(68%)	16(11%)	27(18%)	147
店の対応	5(3%)	112(76%)	2(3%)	28(19%)	147
	多くなった	変わらない	少なくなった	無回答	計
大売り出しなど	2(1%)	94(64%)	22(15%)	29(20%)	147

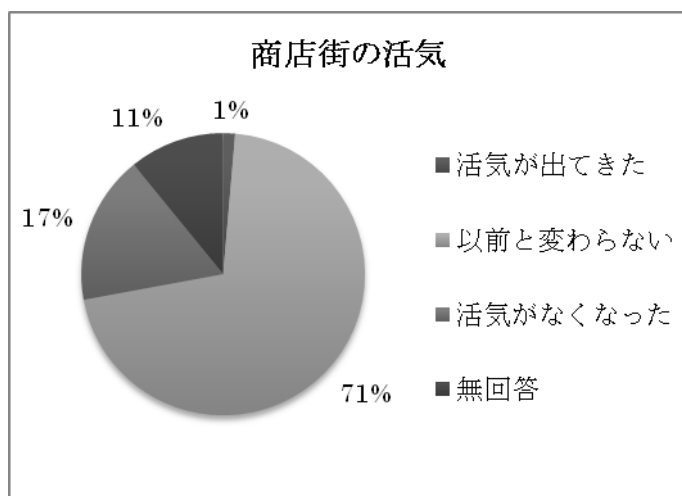
(単位：人)



Q23. 地域通貨流通実験を行ったここ 1,2 年の間に, 商店街の活気に何か変化がありますか。

活気が出てきた	2(1%)
以前と変わらない	104(71%)
活気がなくなった	25(17%)
無回答	16(11%)
計	147

(単位: 人)



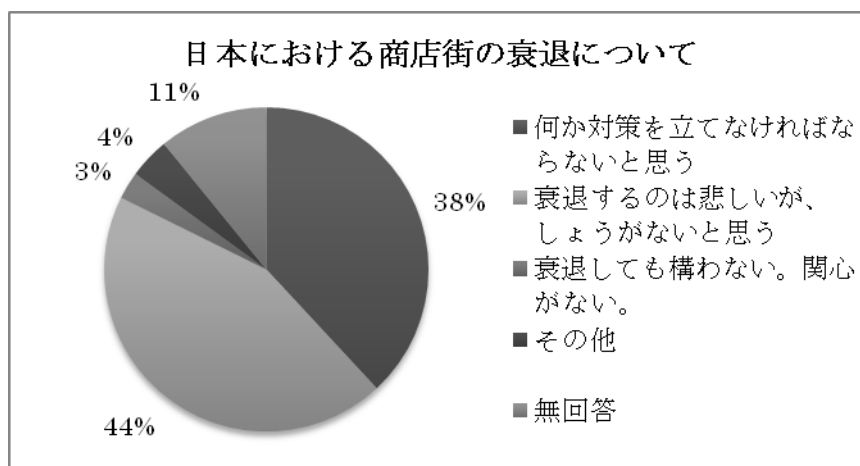
Q25.日本における商店街の衰退が心配されています。あなたはどのように感じていますか。

何か対策を立てなければならないと思う	56
衰退するのは悲しいが、しょうがないと思う	65
衰退しても構わない。関心がない。	4
その他	6
無回答	16
計	147

(単位：人)

<その他の例>

- ・何か対策を立てなければならないと思うし、衰退するのは悲しいが、しょうがないと思う。



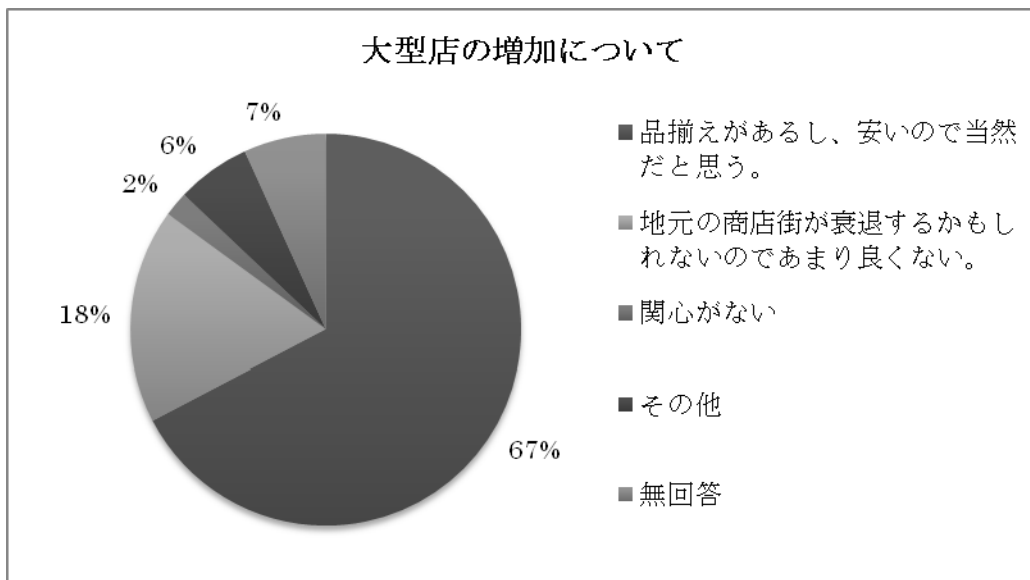
Q26.各地での大型店増加についてはどのように感じていますか。

品揃えがあるし、安いので当然だと思う。	99
地元の商店街が衰退するかもしれないのであまり良くない。	26
関心がない	3
その他	9
無回答	10
計	147

(単位：人)

<その他の例>

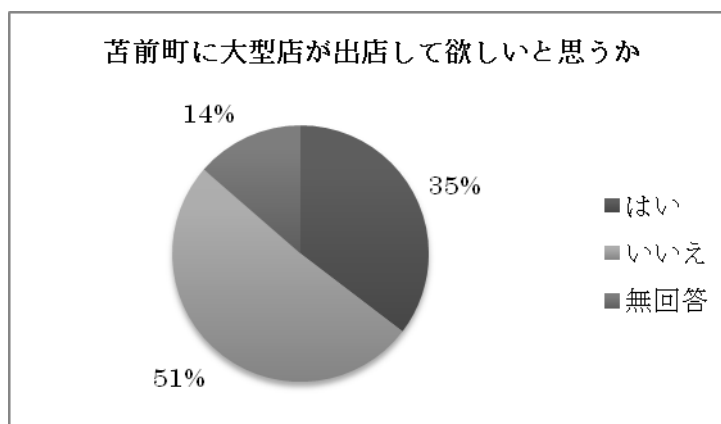
- ・品揃えがあり、安いので当然だけれども、地元の商店街が衰退するかもしれないのであまり良くない。
- ・地元商店がいつも工夫して欲しい。月に一度の催し事など。



Q27. 苫前町に大型店が出店して欲しいと思いますか。

はい	52(35%)
いいえ	75(51%)
無回答	20(14%)
計	147

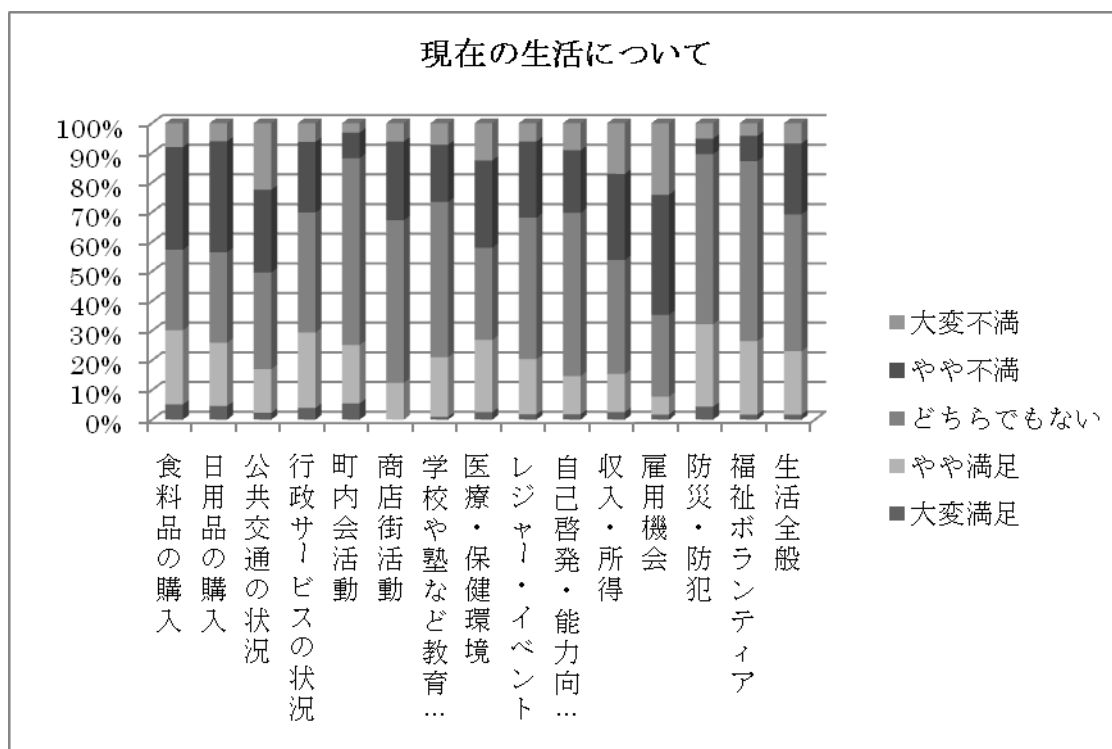
(単位：人)



○苦前町における生活

Q28.苦前町での「現在」の生活をどう感じていますか。

	大変満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	大変不満
食料品の購入	5%	23%	25%	32%	7%
日用品の購入	4%	19%	27%	33%	5%
公共交通の状況	2%	13%	29%	24%	20%
行政サービスの状況	3%	22%	35%	20%	5%
町内会活動	5%	17%	54%	7%	3%
商店街活動	0%	10%	42%	20%	5%
学校や塾など教育環境	1%	15%	39%	14%	5%
医療・保健環境	2%	20%	25%	24%	10%
レジャー・イベント	1%	14%	37%	20%	5%
自己啓発・能力向上機会	1%	10%	41%	16%	7%
収入・所得	2%	10%	31%	23%	14%
雇用機会	1%	5%	22%	32%	19%
防災・防犯	3%	22%	45%	4%	4%
福祉ボランティア	1%	20%	48%	7%	3%
生活全般	1%	17%	37%	19%	5%



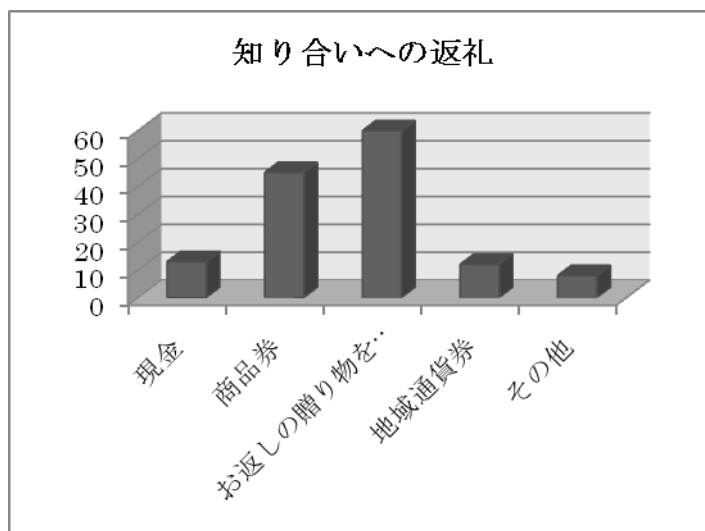
Q30.知り合いに何かしてもらった時に,どのような形でお返しをするのが望ましいと思いますか。(複数回答可)

現金	13
商品券	45
お返しの贈り物をする	60
地域通貨券	12
その他	8
計	138

(単位：人)

<その他の例>

- ・礼のみ
- ・何かしてあげる
- ・食事に誘う



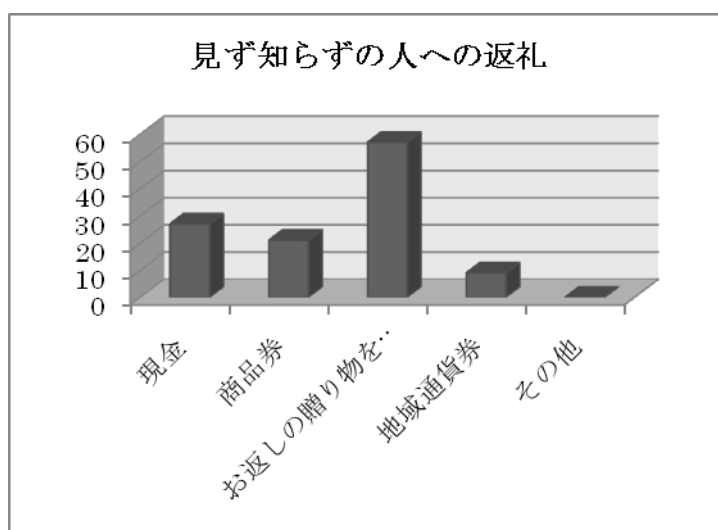
Q31.見ず知らずの人に何かしてもらった時に,どのような形でお返しをするのが望ましいと思いますか。(複数回答可)

現金	27
商品券	21
お返しの贈り物をする	57
地域通貨券	9
その他	6
計	114

(単位：人)

<その他の例>

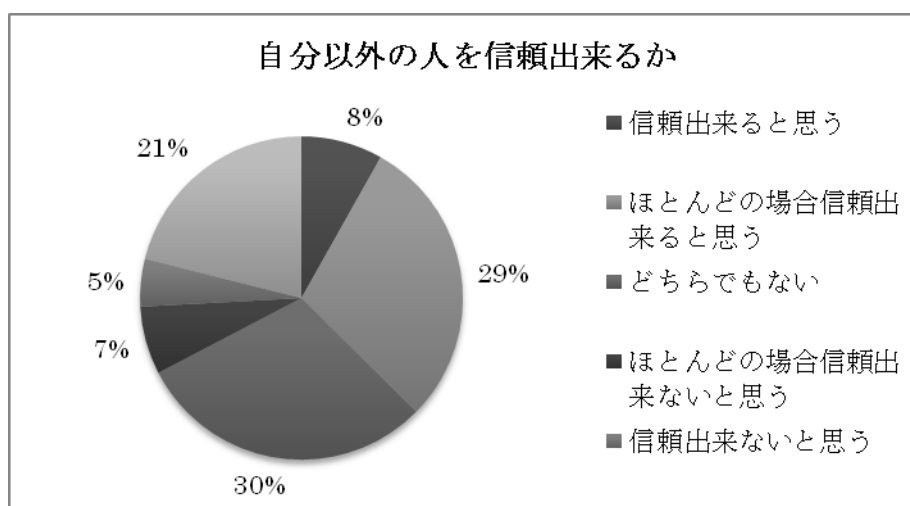
- ・礼のみ
- ・場合によっては葉書



Q32.一般的にあなたはあなた以外の人を信頼出来る方だと思いますか。また、その人が知り合いであった場合はどうですか。

信頼出来ると思う	12(8%)
ほとんどの場合信頼出来ると思う	43(29%)
どちらでもない	44(30%)
ほとんどの場合信頼出来ないと思う	10(7%)
信頼出来ないと思う	7(5%)
無回答	31(21%)
計	147

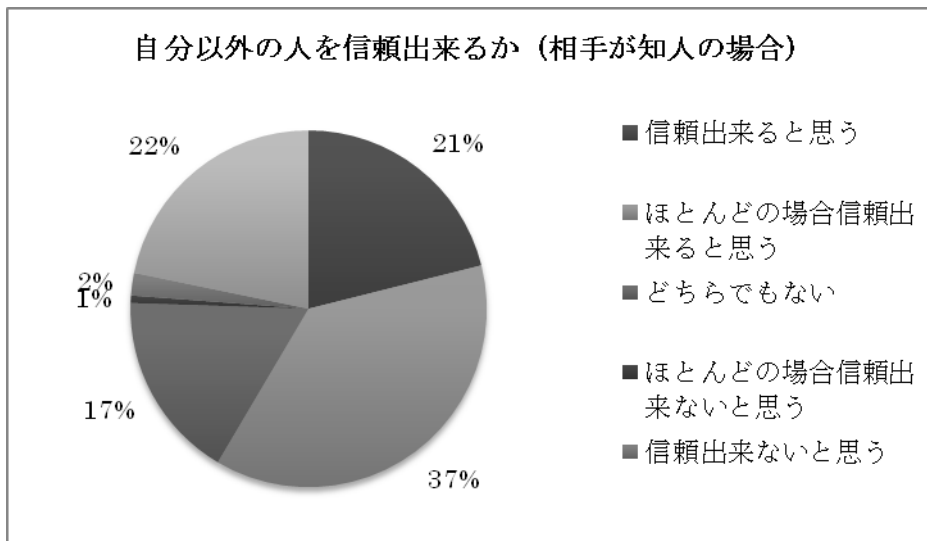
(単位：人)



<相手が知り合いの場合>

信頼出来ると思う	31(21%)
ほとんどの場合信頼出来ると思う	55(37%)
どちらでもない	25(17%)
ほとんどの場合信頼出来ないと思う	1(1%)
信頼出来ないと思う	3(2%)
無回答	32(22%)
計	147

(単位：人)

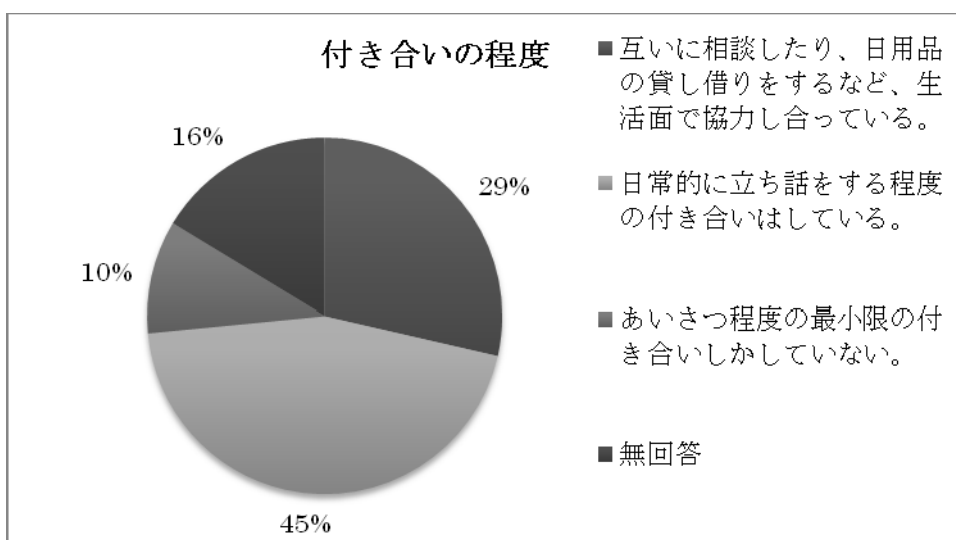


Q33.ご近所の方とどのようなお付き合いをされていますか。

①付き合いの程度

互いに相談したり、日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力し合っている。	42(29%)
日常的に立ち話をする程度の付き合いはしている。	66(45%)
あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない。	15(10%)
付き合いは全くしていない。	0
無回答	24(16%)
計	147

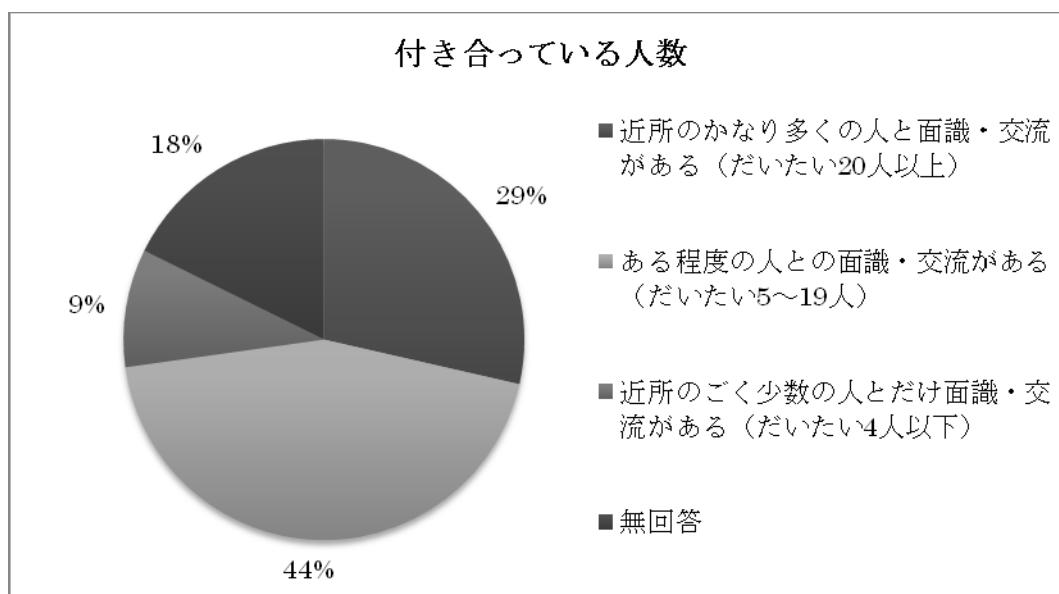
(単位：人)



②付き合っている人の数

近所のかなり多くの人と面識・交流がある(だいたい 20 人以上)	42 (29%)
ある程度の人との面識・交流がある(だいたい 5～19 人)	65 (44%)
近所のごく少数の人とだけ面識・交流がある(だいたい 4 人以下)	14 (9%)
隣の人がだれかも知らない	0
無回答	26 (9%)
計	147

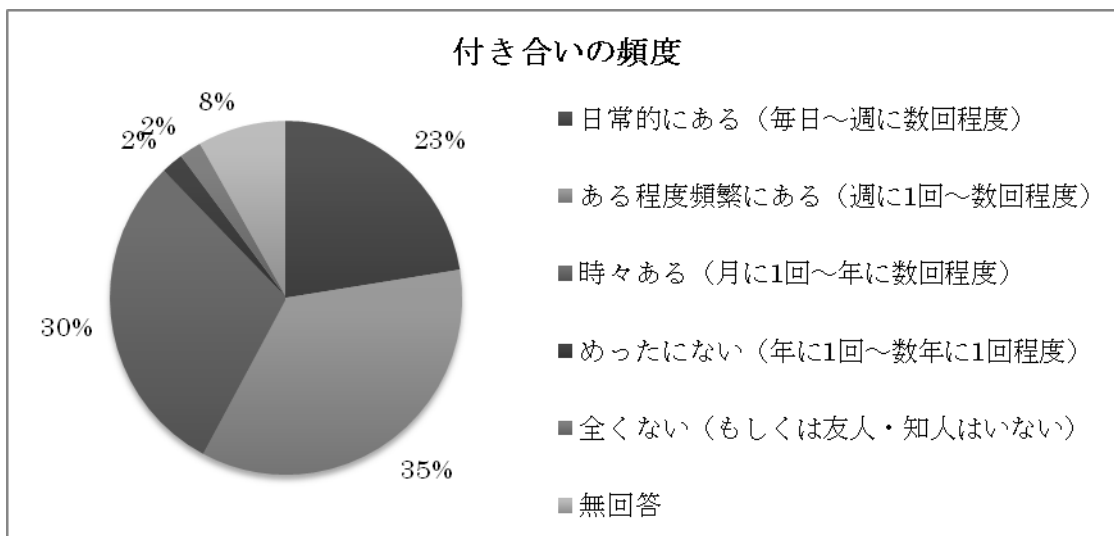
(単位：人)



Q34.友人・知人との付き合いについて、普段どの程度の頻度で付き合いをされていますか。

日常的にある(毎日～週に数回程度)	33 (23%)
ある程度頻繁にある(週に 1 回～数回程度)	52 (35%)
時々ある(月に 1 回～年に数回程度)	44 (30%)
めったにない(年に 1 回～数年に 1 回程度)	3 (2%)
全くない(もしくは友人・知人はいない)	3 (2%)
無回答	12 (8%)
計	147

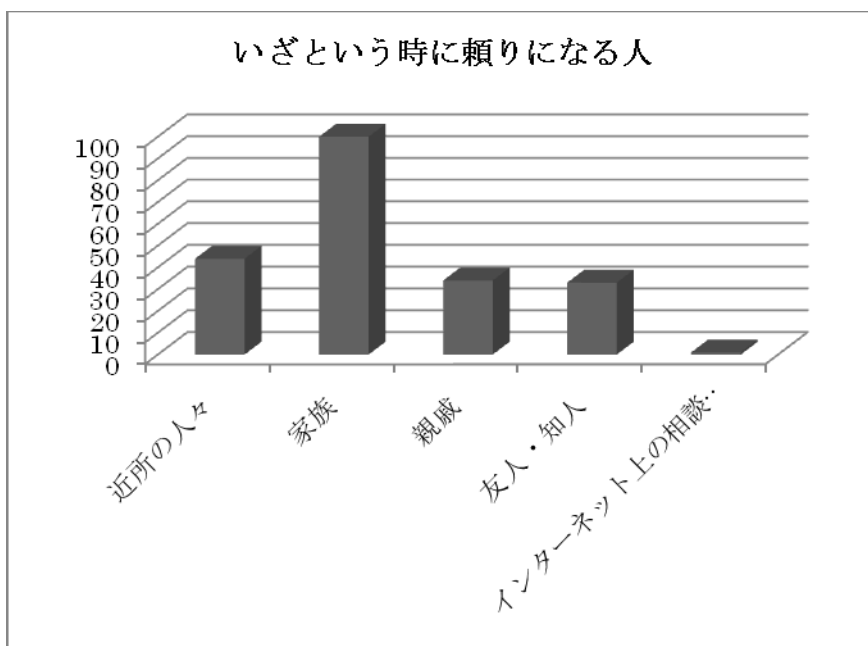
(単位：人)



Q35.あなたにとって、いざというときに頼りになる人とはどのような人ですか。（複数回答可）

近所の人々	44
家族	100
親戚	34
友人・知人	33
インターネット上の相談相手	1

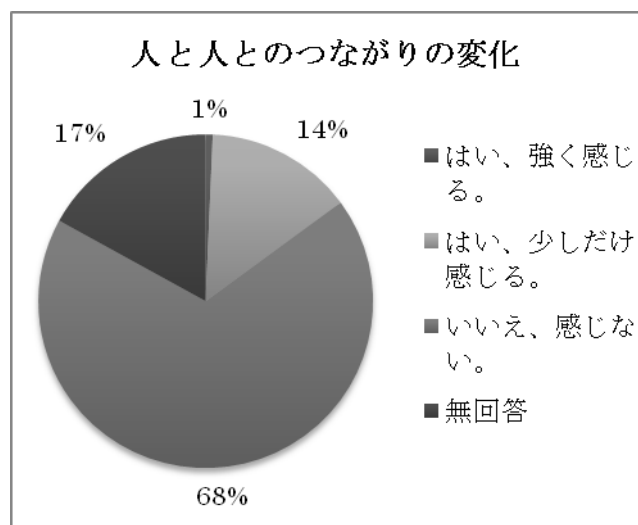
（単位：人）



Q36.地域通貨が流通するようになってから、人と人とのつながりに何か変化があると感じていますか。

はい、強く感じる。	1(1%)
はい、少しだけ感じる。	21(14%)
いいえ、感じない。	100(68%)
無回答	25(17%)
計	147

(単位：人)



III インタビュー・グループディスカッション報告

1 インタビュー調査

インタビュー調査は、第二次試験流通開始1ヶ月後（2005年9月5日）と第二次試験流通実験終了後（2006年2月22日-24日）の2回にわたって実施した。インタビュー対象者は、地域通貨協議委員、苫前町長、商工会関係者を含む苫前町民から選び出した。

1-1 第一回インタビュー

調査方法

- ・日時：2005年9月5日（月）
- ・場所：苫前町公民館
- ・時間：11:00-17:00
- ・対象：地域通貨協議会委員、苫前町長、商工会関係者（計10名）
- ・方法：地域通貨協議委員に対しては、3名1組でのグループインタビュー、苫前町長には個別インタビュー、商工会関係者については2名同時のグループインタビュー
- ・内容：第一次流通実験の感想と第二次流通実験への課題

主たる質問項目

- ・第一次流通実験に対する印象
- ・第二流通実験の印象
- ・地域通貨実験を通じて見えてきた課題・展望

回答要約

第一次流通実験の感想については、地域通貨協議会の委員からは、(1)地域通貨の理解度の低さ、(2)裏書記載や入手方法などの運用方法、(3)ボランティアへの利用の難しさが指摘された。(1)については、地域通貨を利用することの意義など、地域通貨それ自体のイメージが利用者からみて不明瞭であったこと、商工会が主催で開かれた地域通貨講習会へ出席しなかった特定事業者が多かったことなど聞いた。また、(2)については、商店自らが裏書を行ったこと、流通範囲が限定されていたため受け取った地域通貨を換金する他なかったこと、さらに商店ごとで地域通貨の扱い方が異なっていた。さらに、(3)ボランティアは日頃から当たり前のように行っているため、わざわざ地域通貨を利用することに抵抗感があるとのことだった。

これらの問題に対して、高齢者への地域通貨の説明、世代間の意見交流、地域通貨を使ってもらえるような商店街の努力、さらに、主婦層の利用促進など、さまざまな課題が浮かび上がった。これは、第二次流通実験において、商工会主導から地域通貨協議会が主導になって行う形を採用することにもつながった。インタビュー当時は第二次流通が始まって1ヶ月ほど後であったが、町民の地域通貨を理解したい要望に応えるべく、出前講座を開いたり、利用範囲が広がったり、さらに委員となったことで地域通貨普及にむけて自覚と責任を感じるとの意見も聞いた。第二次流通に向けて、商店街で利用を促進させるような工夫や努力が行われていることがわかった。

商工会の側でも、第二次流通実験の目標を、農協や漁協を含めたあらゆる事業体で利用できるようにすること（漁協では利用できなかった）、各団体あるいは個人間のボランティア活動の促進におくとのことだった。この時点では、地域通貨協議会の委員による利用アイデア等が出てくることに期待しているようであった。

補足：インタビュー回答詳細

(1)地域通貨協議会委員

・インタビューは、三つのグループにわけて行われた。以下ではグループごとに要約する。

(a)システム委員3名

第一次流通実験に対する印象

- ・地域通貨そのものに対する理解が困難であり、店舗ごとに対応しきれていなかった。
- ・裏書きの記載に手間がかかるため、利用者がなかなか裏書きしてくれず、商店側がすることになってしまった。
- ・商店に入ってきた大量の地域通貨の使い道がなく、結局、地域通貨を循環させずに換金したり、商店の地域通貨を個人的に購入したりするケースも出てきていた。

- ・ 地域通貨の意義についてあまり理解ができず、地域通貨をわざわざ利用することの意味、普通のお金との違いなど、はっきりとした理解が難しい印象を持った。
- ・ 利用者側としては、商品の購買の側面では、ちょっとしたことで地域通貨の利用ができるが、ボランティア活動に対して地域通貨を利用することはなかなか難しい。ボランティアを当たり前のようにやってきた町民たちにとって地域通貨を浸透させる必要性が見当たらない。

第二次流通実験の印象

- ・ 前回とは違って、町民の地域通貨の積極的な理解を求める声が高まっている。商工会が中心となって、出前講座として出張し、地域通貨についての説明を行うなどの工夫がなされている。
- ・ 第二次流通実験が始まってからは、地域通貨の使い道がいろいろと拡大してきている。また、地域通貨事業推進協議会の下に専門委員会を3つに区分し、組織を小規模化したことによって前回より意見の出方が活発である。町民がより地域活性化について何か貢献できることを考えるようになってきていると感じている。

地域通貨実験を通じて見えてきた課題・展望

- ・ 地域通貨を導入しても、商店の営業を改善することにまで手を伸ばすことができない現状では、商店への先行投資が必要である。
- ・ 地域通貨の電子マネー化などの話もでているが、現実として、高齢者たちにどのように説明していくか難しい面が残されている。さらに、今後コミュニティ活性化、あるいは街づくりと地域通貨のコラボレーションについても、まだまだ考えの及ぶ範囲ではないようである。
- ・ 若者や高齢者など世代を超えた活発な意見交換が重要になってくる。その意味で、高齢者事業団（最近作られた町民高齢者グループ）にも積極的な参加を求めている。
- ・ 現実には、苫前町で生活していくのに精一杯であるが、それでも何とか地域の人々の要望にこたえられる商店づくりを心がけたい。また、若者たちを地域にどう根付かせていくかについても、今後考える必要がある。
- ・ 消費者の立場として、商店街には営業の改善を求める声があった。地域通貨を導入しても、商店内の商品の数や種類などが現状のままである点が今後の課題として指摘された。

(b) 諸団体委員 2 名と広報委員 1 名

第一次流通実験の印象

- ・ 実験前の利用者への説明が不足（説明から実験までの時間も短かった）しており、特にボランティア面での地域通貨を利用する仕組みがわかりにくかったようである。商品

の購入における利用については理解できるが、利用する場所（商店）が少なく、やはり大型店にはかなわない。

- ・ 地域通貨がどういうものかについて町民全体がなかなかイメージをつかみづらかったのではないか。
- ・ 裏書については個人情報などの問題で利用者には不評であり、結局商店側が記載することになってしまった。例えば、自分の店で活用された地域通貨券を商工会に持っていった際、裏書が未記入のものが見られた。未記入とわかると、それらに対して、記入を要求された。仕方なく、私が代理で記入した。
- ・ 地域通貨を個人でわざわざ購入してまで利用する意味がよくわからなかったり、地域通貨交換所が不便だったりする点についても問題視している。そもそも、個人で地域通貨を購入し、それをボランティアに利用するケースは聞いたことがなく、ボランティアのほとんどがほぼ商工会のばら撒きによる団体組織の利用ケースではないか。苫前町民同士が日常に助け合っていることに対して、ジュースを送ったりして、お礼をしている。そういう既存のお礼の仕方に変えて、地域通貨にしてほしいといわれても、なかなか難しい。

第二次流通実験の印象

- ・ 現在までの第二次流通実験の印象としては、地域通貨に対する興味を持つ人々が昨年に比べ増加し、参加レベルが高まってきている。

地域通貨実験を通じて見えてきた課題・展望

- ・ 地域通貨を利用する店舗側が地域通貨講習会に参加していなかった。
- ・ 地域通貨の使い方に関する説明が、商店ごとにばらばらになってしまっていた。
- ・ 特に高齢者などにとっては、実際の地域通貨の利用を見ないと難しいのではないかと。高齢者への浸透を図ることが重要だと思っている。
- ・ 今回設置された広報委員会のメンバーですら地域通貨の理解度が深くはなく、また、説明するのがなかなか難しい。今後は、出前講座などをうまく利用して理解を深めたい。
- ・ 主婦層の地域通貨理解を進めることがとても大切だと思う。地元での買い物の主体である主婦層が、地域通貨の使い勝手を知らなければ、これは、なかなか広がっていかないのではないかと思う。
- ・ 消費者側としては、今後ボランティアとしての側面よりもむしろ、購買の側面でもっと工夫がほしい。

その他

- ・ 生まれてからずっとこの町に住んでおり、比較するものがないので、苫前町の印象を問われても、何がよくて何が悪いかわからないと述べていた。ただ、近年、病院や教育などの公共サービスが低下しているという問題がある。

(c)広報委員 1 名

第一次流通実験の印象

- ・ 第一次流通実験は、ある意味で地域通貨を利用する商店側にとっての実験だったのではないか。

地域通貨実験を通じて見えてきた課題・展望

- ・ 現在の苫前町のイメージとしては、やはり人口の減少、産業の衰退、雇用の減少などといった問題が存在している。町民としては、町に対しての期待はあまりなく、地域に対する愛着心が揺らいでいるのではないか。
- ・ 今後いっそう過疎が進行し、共同体的発想が薄らいでいくのではないかと考えている。今後の課題はものの動きを活発化させ、人間関係を充実したものにする必要がある。そのために、地域通貨をもっとうまく活用して、商店街の活性化のためだけでない、地域通貨のもっと本質的なところを見ていく必要がある。その意味で、第二次流通実験で、農協などの参加は非常に大きい。ここから、今後地元の商店街や特定事業者などが連携して地域通貨の利用を活発化させることで、町全体が変わっていくのではないか。

(2)苫前町長

- ・ 住民を育てるまちづくりと地域通貨が連携していけばよい。これは、従来の官の発想ではなくて、民すなわち市民によるまちづくりである。地域通貨の取り組みは、町長と商工会長の連名で推進してきている。これは、町全体の取り組みという考えからである。
- ・ 苫前町は、まちづくり基本条例を町民による委員会を中心に策定した。苫前のまちづくり基本条例は、町議会も対象にしている点で、ニセコ型より包括的なものである。

(3)商工会職員

- ・ 第二次流通実験では、第一に農協や漁協を含めたあらゆる事業体の参加、第二に各組織体でのボランティアと個人間のボランティアを促進していくことが目標である。さらには、地域通貨の利用にビジネス的な要素も加えることができれば、いっそうの町の活性化につながると考えている。
- ・ 時間的、あるいは財政的な制約はあるものの、それでも昨年と比べ、町民が自発的に地域通貨を用いたさまざまなアイデアを生み出しているのが心強い。そのひとつとして、年末の歳末助け合い募金の一部を現金ではなく地域通貨として分配する案が現在議論されている。さらには、前回の実験で大量に捨てられたりしたポイント券の回収を行い、これを環境事業やボランティアに利用しようとする試みも登場した。
- ・ 地域通貨のまち、苫前町という看板を作成し、設置予定である。

1-2 第2回インタビュー

調査方法

- ・ 2006年2月22日(水)-24日(金)
- ・ 場所：苫前町公民館，その他
- ・ 対象：役場職員2名，社会福祉協議会2名，特定事業者6名，町内会関係者1名，女性連絡協議会関係者1名，商工会青年部関係者1名，町会議員1名，保健士1名，ボランティア3名，地域通貨協議会委員5名，商工会関係者1名 計18名(重複あり)
- ・ 方法：全て個別インタビュー
- ・ 内容：二度にわたる地域通貨流通実験への関わり方，地域通貨導入による地域への経済面や社会面における影響，地域通貨の課題，地域通貨の本格導入への関心。

(1)地域通貨協議委員

主たる質問内容

- ・ 地域通貨協議委員の具体的活動
- ・ 地域通貨協議委員になった経緯
- ・ 地域通貨協議会の三つの部会の連携
- ・ 地域通貨に対する町民の反応
- ・ 街づくりと地域通貨の可能性についての意見

回答要約

地域通貨協議委員会は，地域通貨流通の主導的役割を担う目的の下，第二次流通実験に当たって創設された委員会であり，システム，広報，諸団体連携という三つの小部会に分かれている。人選は商工会の方で行ったためほとんどの委員は商工会に関わる人であった。

実際の活動内容としては，2～3回の委員会に出席すること，広報としてポスターやチラシの配布等が挙げられていた。商工会から与えられた仕事をこなすということが委員会の仕事の大半であるという実態が見える。しかし，意識の高い委員の中には，スタンプの使用法についてのアイデアを出したり，地域通貨のよい面を人々に積極的に伝えようとする者もいたようである。実際に何らかの実践には至っていなくても，委員になったことで責任や張り合いを感じるなど，町に対する意識を高めることができたという意見も聞かれた。また，もっと早い段階から参加していればよかったという意見に現れているように，初期時点で地域通貨の仕組みや運用方法，さらには地域通貨の理念などについて地域通貨協議会が中心となって決めていくことが参加意識を高めることになると思われる。

地域通貨の評価とそこから出てきた課題について最も多く出された意見は，町民が地域通貨を利用することのメリットや理念あるいは使い方について理解をする必要があるということであった。第二次流通実験では，町民の多くが利用するAコープやセイコーマートなどにおける地域通貨の利用が可能になった。これについては，他の商店主も好意的であ

った。その一方、商店間でのコミュニケーション不足が原因で、商店街全体として地域通貨を契機に行動を起こすことに至らなかったと指摘する意見もあった。これは、具体的に地域通貨を地域活性化につなげていく上で不可欠なことは何かを指摘するものである。また、町民からの主体的な取り組みがなければならないこと、とくに最も商店街を利用する主婦層が関わらなければならないことも指摘された。地域通貨の利用に関して、特定事業者間のコミュニケーションと主婦層のコミュニケーションの活性化がもっと必要であるという課題が浮き彫りになった。これに関しては、地域通貨の会議にもっと主婦層の人が参加すること、あるいは夫婦で気軽に参加できる雰囲気の懇親会的なものが必要であるという話も伺えた。その意味で、女性連絡協議会として積極的に協力したいとの意見が出ていたことは心強い。

最後に、地域通貨実験の評価についてであるが、一様に経済活性化を挙げていたことが特徴的である。これはボランティアを軽視しているのではなく、地域通貨が商店街でもっと使われない限りボランティア活動の対価としても使いにくいという認識を示すものである。高齢化の進行によりボランティアそれ自体のニーズはある。現状ではまだ除雪などの助け合いの土壌が残っているが、地域の連帯感が薄れていることは確かであり、やがてはその土壌が枯れ果ててくるだろう。その一方で、ボランティアの主体になりうる若者は他の町や市に働きに出ているため、ボランティアをするような時間的・気持ち的な余裕はない。地域通貨で商店街を活性化することは、若者たちが集まってコミュニケーションをとることのできる場所を提供する。これがやがてはボランティア活動へとつながっていくことになる。このような意味で、地域通貨に今求められていることは経済活性化であるということになる。

(2) 苫前町職員

主たる質問項目

- ・ 地域通貨流通実験に対する関わり方
- ・ 商工会との協力関係
- ・ 苫前町での地域通貨流通の展望
- ・ 苫前町としての街づくりの状況

回答要約

苫前町役場は、引き続き第二次流通実験においても発行主体であり、2005年9月に行われた町長とのインタビューにも記されているように、地域通貨を町全体の取り組みとして町長が位置づけていることがわかる。ただし、職員からのインタビューからは必ずしも役場職員が一体となって地域通貨流通実験に取り組んでいないことがわかった。事実上の主導的役割を果たした商工会との連携は役場の担当職員までに止まっており、役場全体で地域通貨実験へ取り組もうというムードではなかったことがわかった。

地域通貨を本格的に流通できるかどうかは、流通実験を通じた費用対効果についての議論が必要であるとの意見があった。具体的には、商店街での消費の落ち込みが顕著であり、それに歯止めをかけられるかどうかのひとつの指標となるとのことであった。

(3)商工会職員

主たる質問項目

- ・ 地域通貨流通実験を通じた苦前町の変化
- ・ 地域通貨流通実験において苦労したこと、よかったこと
- ・ 他の団体との協力体制
- ・ 今後の地域通貨の展望

回答要約

2 回の地域通貨流通実験を通じてあらゆる面で中心的役割を担ってきた商工会職員からは、2 回の実験で地域通貨が着実に定着しているという感想が聞けた。とはいえ、いくつかの課題もある。ひとつは、事業者によるポイント券の配布のばらつき、裏書記載の問題などである。後者については調査上必要であるのでやむを得ないが、本流通においてはできれば裏書なしで行いたいと考えているようである。また、前者については、できれば統一したいがなかなか難しいとのことであった。第二は、ボランティア活動への地域通貨の利用についてである。基本的にボランティアをしたい人、してほしい人がどんどん地域通貨を利用して行ってくればよく、商工会が主導して行うことはないとの考えであった。経済面では商工会が、ボランティア面では役場あるいは社協が中心となっていくのが理想であると考えているが、1 年間の実験段階で役場や社協に協力を求めることができないということであった。役場も社協も時間や余力がないので、協力は難しいとのことである。

第一次流通実験の経験を踏まえて地域通貨協議委員会が結成されたが、人選や組織など商工会の方で決めたこともあり、結果としていっそう手続きが煩わしくなった。本流通においては委員会なしで行いたいということであった。本流通に向けて、カード化、デザイン、ネーミングなどの問題を解決しておきたいとのことであったが、それは協議委員会ではなく、地域通貨流通実験時に停止していたニコニコシール会を中心にして行いたいとのことであった（現時点において、まだ本格流通に向けての動きは見られていない）。

(4)特定事業者

主たる質問項目

- ・ 特定事業者になった経緯
- ・ 地域通貨の利用状況
- ・ 商店街から見た地域通貨の評価・展望

回答要約

特定事業者によると、地域通貨が売り上げそれ自体に貢献していないということであった。ただし、ある商店主からは、売り上げは激減したが、地域通貨の利用量は第一次実験に比べて3倍くらい伸びた、地域通貨がなければもっと売り上げが下がっていただろうという意見もあった。第二次流通実験において初めて特定事業者になった商店主は、第一次流通実験を見てその仕組みや実態が見えてきた、スタンプ券を出さなくてもよいということで参加したと述べた。

実際に取り扱ってみての感想は、お客に使い方を説明することの難しさ、裏書記入や枚数の確認などの煩わしさがあるとのことであった。また、地域通貨券よりもスタンプ券を使う頻度の方が多かったという商店もあった。第二次流通実験でAコープやセイコーマートなどでも使えるようになったことを他の商店主は好意的に受け止めていた。自分自身が使えるだけでなく、お客に渡す時にも役立ったという。

実際に受け取った地域通貨については、できる限り換金しないように他の商店で使うようにしたとのことだった。ただし、受け取った地域通貨券を商店の方でボランティアや景品として渡すことには抵抗があるようだった（裏書されている地域通貨券は、景品としても渡しにくいようだった）。

(5) 苫前町振興公社（苫前温泉「ふわっと」）

主たる質問項目

- ・ 特定事業者になった経緯
- ・ 地域通貨の利用状況
- ・ 地域通貨の評価・展望

回答要約

第一次流通実験においては、苫前温泉「ふわっと」の売店とレストランで地域通貨券が利用可能であったが、第二次流通実験からは温泉でも利用可能になった。ポイント券については、本施設では町外の利用者も多いので、そうした利用者には渡さないということであった。地域通貨への取り組みについて特に主体的に行っていることはなく、あくまで商工会からの依頼に応えるという受動的なものであることがわかる。

(6) 商工会青年部（町会議員）

主たる質問項目

- ・ 商工会青年部としての地域通貨への関わり
- ・ 地域通貨流通実験に対する評価・展望

回答要約

商工会青年部の何名かが協議会に参加しているとのことであったが、協議会から青年部へのフィードバックは特になかったということだった。2回にわたる流通実験の評価を付けてもらったところ、一次実験は 50 点、二次実験は 30 点とのことであった。特に、第一次実験でコミュニティ形成の必要性が明らかになったにもかかわらず、二次実験ではこの問題が放置されたままであったため、評価が厳しくなったようである。従来の商店街スタンプであるニコニコシールと地域通貨ポイント券との間に区別がなくなってきたように感じられる。本流通以前に三次実験を行い、そこでは町内会活動を活性化させるなどコミュニティや住民自治を醸成していくことが必要だという意見であった。

(7)社会福祉協議会

主たる質問項目

- ・ 苫前町でのボランティア活動の状況と社会福祉協議会の関わり
- ・ 社会福祉協議会と地域通貨との関わり
- ・ 商工会との関係
- ・ 地域通貨流通実験の評価・展望

回答要約

苫前町では、企業や学校を中心に除雪や空き缶ひろいといったボランティア活動がおこなわれているけれども、町全体でのボランティア活動への取り組みは遅れている。社協では除雪や草刈りのコーディネートをしているが、登録等の手続きのみをしているだけで本当のコーディネートをしているわけではない。ただ、高齢化の浸透により有償ボランティアを必要とする土壌はあるし、必要だとも思っている。商工会が考えた地域通貨のプログラムではボランティアで利用するための考慮がなされていない。現状ではニコニコシールとの違いがよくわからない。女性がもっと利用するためにも、ボランティア活動の方面からのアプローチが必要であるように思う。

(8)保健士

主たる質問項目

- ・ 活動実態
- ・ 苫前町の状況
- ・ 地域通貨流通実験の評価・展望

回答要約

苫前町は、自然の中で暮らせるよさがあるが、介護保険を利用して一人暮らしをしている人にとっては生活が困難である。苫前に住んでいるので、わざわざ古丹別へはいかず、

むしろ隣町である羽幌の方へ行ってしまう。近所や親戚付き合いによる助け合いの中に地域通貨を入れるのは難しい。介護保険で賄えない介護度の低いサービスに対して地域通貨を補完的に使えるようにしていくことが可能性としてある。

(9)ボランティア

主たる質問項目

- ・ 活動実態
- ・ ボランティア活動に参加した理由
- ・ 地域通貨の評価・展望

回答要約

図書室サポーター（本から得た知識を使って、実験や食べ物を作ったりする活動のサポート。参加者は小中学生が中心で、ボランティアは10人弱。費用としては実費100円くらい）に参加した人たちの多くは女性である。子供の遊び場は少なく、町のスポーツクラブに参加する子供たちはそこで交流するが、それ以外に子供たちが集まる場所がない。地域通貨というものがあることは知っているが、現金決済より何が優れているかということについてもっとよく考える必要がある。特に、地域を何とかしようとしている主婦層などの参加を促し、ボランティア組織と地域通貨との連携をとりコーディネートすることのできる人材や組織を組み込んでいくことが必要である。

「現役戦隊ヤルンジャー」とは、社協の方々のアイディアによってできた高齢者の活動であり、園児と一緒に遠足に行ったり、苫前町内を視察したり、中学校の授業参観などを行っている。商業高校の空き家になった寮を利用して、高齢者のグループ・ホームを実現したいと思っている。地域通貨は、賞状の文字書きを依頼するのに使った程度である。町の予算を使っているのだから、もっと地元で根ざしたものにしていけるべきであると考えている。

(10)町内会連合会関係者

主たる質問項目

- ・ 町内会の活動状況
- ・ 地域通貨の利用状況
- ・ 商地域通貨の評価・展望

回答要約

苫前町町内会連合会は現在ほとんど機能していない。仕事が忙しく会議に出席するのが困難であるという理由で、若者の参加がほとんどない。高齢者と若者との調整が非常に難しい。こうした世代間ギャップがあるので、商工会の方から地域通貨の話を聞いた時、成

功しないのではないかと思った。町の仕事の支払いの一部に使うということは考えられるが、ボランティアの方では使い道が思いつかない。

補足：インタビュー回答詳細

(1)地域通貨協議会委員 5 名（内、特定事業者 3 名、前商工会会長 1 名、女性連絡協議会 1 名）協議会委員になった経緯

- ・ 商工会の商業部会に入っていたので、ならざるを得なかった。
- ・ 名前は忘れてしまったが、元々商工会のなかに、町の活性化について 3 つの部会があり、それがそのまま横滑りした。去年かおとし頃だったと思うが、その部会で、栗山の地域通貨の視察もしてきた。

協議会の活動実態

- ・ 風車委員会と老人会で説明会をした。いろいろと質問は出たが、反応はあまり良くなかった（関心は低かった）。
- ・ 地域通貨委員の各部会同士の連携はなかった。委員会をもっと有効に使うべきだった。責任を与えて任せることが必要だった。商工会から与えられた仕事（ポスター貼りチラシ配布）をこなすだけだった。
- ・ 説明会はやった。集まって話題になることはあってもあまり興味がないというか、理解されていない。
- ・ 広報に属していた。地域通貨の使い方を説明することが部会の役割だったが、実際に出向いて説明するような機会はなかった。委員会は、2 回目の実験については、2～3 回開かれた。
- ・ 協議会を設けたことで、責任が与えられ、活動することに張り合いはでてきた。
- ・ 今回は、全体の委員会、個々の部会に分けてやっていたが、頻繁に会合があった。
- ・ 不要なスタンプを箱に入れる意見は委員会の誰かから出たのだと思う。他の部会で何をやっているかについて、最終的なすり合わせはしていたが、スタンプの箱については話にあがっていなかったと思う。
- ・ 各々が責任を持つようになるので、協議会を設けたのは良かったと思う。ただ、各委員会の意見は、だいたい同じようなものだった。
- ・ 商工会のメンバーが中心。A コープやセイコーマートにも、会議に入って、もっと理解してもらえれば良かったと思う。2 回目では、会議に入ってはいたが、より初期の段階で参加していればよかった。
- ・ ボランティア関係の団体の代表も参加はしていた。
- ・ 会合は第二回実験の際にはあまり開かれなかった。ただ、参加者は多種多様。委員でもあまり理解していなかった。
- ・ 広報の手段としてチラシを配ったが、見ても良くわからず、あれではだめだと思う。

- ・委員の一人として、町の女性部会で地域通貨の良い側面を説明した。
- ・名前を決めようという動きはあったが、今のままがわかりやすいということになった。

苫前町の現状・課題

- ・自分優先で町のことを考えない人が多いと思う。
- ・老人が増えているが、昔は元気な老人が多かった。ここ4～5年くらいから、除雪のニーズなどが出てきた。
- ・若者は羽幌などに働きに行っており、ボランティアをするような時間はないだろう。
- ・買い物にしても、若い人が買い物をする場所が必要。根本的な問題は、若い人をいかに集めるか、ということだと思う。
- ・生まれてからずっと苫前町だが、連帯感が以前よりなくなった。近所や班での付き合いがなくなり、人口的にも減少しているのは寂しい。
- ・ボランティアには全く使われていない。ただ助け合いの心の土壌は昔からある。
- ・お金を助け合いのお礼として使うということには抵抗がある。物で返礼したほうが気楽。
- ・一度、町の会議でノーネクタイ、肩書き排除、人の意見を否定しないという取り決めの下、少人数のグループディスカッションが行われた。このような会合をもっと増やすべきだ。

地域通貨実験を通じた変化

- ・導入して、何かを感じ、協力をしたい人も出てきた。
- ・女性部会で説明会などに来てくれといった依頼も多数ある。説明会や広報誌で体験談などを話すともっと良いのではないか。そこから住民同士のネットワークが生まれればよいのでは。

地域通貨実験の評価・改善点

- ・周りで地域通貨が話題になったことはほとんどない。ニコニコシールとどう違うのかという話題はあった。除雪作業のお礼として使われていると聞いたことがある。
- ・地域通貨を地域の活性化につなげていきたいが、どうしていけばよいかは難しい。商工会主導で半ば強制的にやっても駄目で、関心のあるもの同士でいろいろと決めてやっていったほうが良い。リーダーシップは役場がとるのが良いと思う。
- ・地域通貨はあっても良いと思うが難しいと思う。面倒くさいという声が多い。何よりも町民(主に主婦層)への理解を深めることが先決だと思う。
- ・前回よりも、理解は広がったと思う。ただ、商工会がある古丹別地域の方が、理解は深かった。苫前では、役場でも理解していない人がいた。もっと時間がかかると思う。
- ・苫前地域の商店は、ポイントを出すことが少ないと聞いた。地域通貨に限らず、大売出しの負担金でも、6対4くらいで古丹別の方の負担が大きい。苫前地域の商店はあま

り負担をしない。地域通貨でも同じことが言える。

- ・ 前回よりも、広報など、やれることはやっている。町民の理解には、時間がかかると思う。
- ・ 今回は、葬式のお手伝いなどに使っていた。ボランティアでも、地域通貨は動いていたと思う。
- ・ 地域通貨を買える場所は増えた。ただ、委員など、限られた人しか買いに来なかった。
- ・ 成功に導くためには、町を盛り上げるようにみんなが協力しなければならないということを、町民が認識することが必要だ。
- ・ 商工会では、給料のうち、いくらかを地域通貨で支給されていたはず。役場もそういう形で協力してくれれば良いと思う。
- ・ 商店街への影響からみれば、マイナスは少ないと思う。元々、シールをやっていたし、補助金もあったので負担は少なかった。マイナスは会議が重なることくらい。プラスの方が大きいのではないか。
- ・ 福祉課が地域通貨を買って、使っていたということは聞いている。ただ、役場にももっと門戸を開いて欲しかった。
- ・ 地域通貨は、三金会（異業種交流会、60 人くらい）や信緑会（留萌信金古丹別支店の顧客の集まり）の景品に使ってもらっていた。団体関係に、使ってくれと無理に勧めた部分も大きい。使いたくて使っているという感じではなく、まだ浸透はしていないと思う。
- ・ 実際の使い方や、町の活性化など、使うことのメリットを利用者に説明し、納得してもらうことが成功のカギ。
- ・ 地域通貨を実施することは評価できる。ただ、使える店の整備や、ボランティア活動との関係で地域通貨をどのように位置付けるか、はっきりさせる必要がある。また、地域通貨を浸透させる努力が必要。文章だけでは理解できない。講習会なども必要だろう。特に年配者が理解していない。
- ・ 実験をして良かったことは、使用方法の話等で会話をすることができたので、近隣住民とのコミュニケーションがとれたこと。主婦から教えてほしいとの要望が多数あり、使いたいという人は多数いた。ただし、商店同士で、地域通貨に関する会話はなかった。ある店ではポイント券を出してくれないなどの苦情が、他の店に寄せられた。
- ・ 独自にスタンプなどを押している店では、ポイント券はあまり出さなかったようだ。
- ・ 店同士の話し合いがないため、ポイント券を出す、出さない等の足並みが揃わなかった。
- ・ 地域通貨実験の参加に関して、商店間でかなりの温度差があるようだ。
町民が会合にあまり参加していないし、男性の会合参加者が、家で配偶者にその情報を伝えない
- ・ 女性を主導にしなければならないが、古丹別の商工会女性部には小売店の人がいない

ので、苫前と古丹別の女性部とで共通の話題がない。商業部会に女性を入れなければならない。

- ・ より参加してもらうには、地域通貨自体の魅力を増さなければならない。これについては、実際使っている人々が考えなければならない。
- ・ 老人にとって 2P 券は小さすぎて使いづらく、カード化しなければならない。
- ・ やはりネーミングをつけたい。みんなの地域通貨にしたい。
- ・ 1 回目と 2 回目の実験に点数をつけると（合格点を 70 点とする）、1 回目は 40 点、2 回目は 60 点。地域通貨券を持ってくる人が増えた。役場に置いたのが良かった。しかし自発的に喜んで地域通貨券を使っていないのが減点。合格点に達するには、特定事業者が団結し、足並みを揃えてアイディアを出すべきだ。
- ・ 現代は一箇所集中型の店が多く、お客さんにとっては良いが、店にとってはつらい。女性同士のネットワークによって使い勝手が向上できるのでは。
- ・ 試用期間前に戦略を練って、アイディアを出したほうが良い。
- ・ 特定事業者に通貨券を設置・販売できると言っていたのに、遅れてしまった。
- ・ やりだしたらじたばたしてはいけない。
- ・ 主婦層がもっとかかわるべきである。
- ・ 主婦を会合などに呼ぶのではなく、こちらから出向いてはどうだろうか。
- ・ 会議と名を打っては堅苦しくなるのでだめ。
- ・ 夫婦で会議に出たほうが良いのでは。
- ・ ポイント券を払う、払わないといった足並みを揃える必要がある。
- ・ 商店の利益のためにだけやっている感じがするので、お客さんに得をしたと思わせないとだめ。券の番号で抽選し、何か当選させるとか。楽しみを見つけさせることが必要。
- ・ 苫前町に地域通貨はあったほうが良いが、もっと魅力的なものにしなければならない。
- ・ 行政頼みでは盛り上がらない。また長く続かない。町民から草の根的にやらなければならない。
- ・ 特定の人というのはないが、ひとつの団体から一人ではなく、2〜3 人の仲間を呼ぶとよい。
- ・ 団体の長であると、下の人に全く話が伝わらない。
- ・ 小学校の PTA、保育所の人々、「ふわっと」で働く店員などに働きかけたほうがよい。

地域通貨に求められる役割

- ・ 商品券としての役割が一番重要。経済を活性化していかないとボランティアでも使われないだろう。
- ・ 地域経済活性化が一番重要。
- ・ 本格導入した場合、地元で買い物がされるかどうか成功の判断基準となる。地域通貨のメリットは、地元で消費されることにあると思う。

- ・地域通貨の導入は、地域経済にとってプラスだと思う。しかし、品揃えや開店時間など、地域通貨を扱う側が、販売体制を整備する必要がある。
- ・地元の人が、どれだけ地元で買い物をするかが、成功の判断基準になると思う。
- ・（女性連絡協議会として、）地域通貨実験に関して、商工会から協力要請はされていなかったが、むしろ、こちらから協力したいくらいだった。

(2)役場職員 2 名

苫前町役場の地域通貨への関わり方

- ・地域通貨実験を行う話は聞いているが、直接の担当でなければ具体的にはわからない。
- ・役場として具体的なアクションはなかった。
- ・商工会との関係も担当レベル（商工観光係）でしかない。
- ・役場の職員で温度差がある（担当者以外の関心が薄い）
- ・商工会で地域通貨をやっていると聞いた者が多い。
- ・商工会からは働きかけがあったけれども、役場全体での地域通貨実験へ向かうムードはなかった
- ・町長の考えが職員全体に伝わっていなかったのでは。
- ・本格導入に向けて、1 回目実験の時の課題は、実験期間の短さもあってデータの精度が低い。費用対効果を見るために、より精度の高いデータが必要。
- ・地域経済と地域コミュニティの再生という目的はわかっているが、事業として費用対効果があるのかどうかについて吟味する必要がある。
- ・経済コミュニティの再生を必要とするところから、幅広く委員を集めるところはよいが、ボランティアの側面から見れば、メニューの充実だけではなく、コーディネーターを務める役割が必要だったのではないか。地域通貨協議会のメンバーにその役割を担える人がいればよかったのではないか。
- ・地域通貨それ自体が補助対象とはなっていなかったもので、協議会の事務的作業を役場の方で行うことはしなかった。
- ・2 回目地域通貨実験の当初の予算は 791 万円で、補助対象となっているのはそのうちの 220 万円。110 万円は苫前町が、110 万円は国が補助
- ・町役場として、地域通貨限定の話はなかった。すでに商工会の方で構想ができ上がっていた
- ・試験流通での行政の負担、商工業者の負担、カード化に伴う負担など、本格導入に至る負担の問題をどうするか。その負担に見合う効果があるのか。これらについて、改めて議論が必要となる。

地域通貨の本格導入の判断基準

- ・現在商店街での消費の落ち込みが著しい。地域通貨でそれに歯止めがかけられるかど

うかがひ一つのポイント。

- ・ コミュニティの再生については、現状としてコミュニティの連携は強い。問題は世代間のコミュニケーションにある。
- ・ 経済面とコミュニティ面を両立させるというよりも、現状としては経済面の方が基準としては強い。

ボランティアを含めた苫前町の課題

- ・ ボランティアについては、最近有償ボランティアも出てきている。
- ・ 地域通貨でのボランティアによるコーディネーターの必要性があるが、そもそも有償ボランティアが、受け入れにくい地域である。
- ・ 例えば、除雪を地域通貨では頼みにくいし、地域通貨をお礼として使いにくい。また、社会福祉協議会を中心に除雪ボランティアは行われている。

(3)商工会職員 1 名

- ・ 2 回の実験を通じて、地域通貨は着実に定着していると思う。しかし、業者においても、地域通貨に対する意識の違いがある。地域通貨の販売量に比べ、ポイントはあまり出ていない。ポイントをつけていない業者がいると考えられる。こうした問題は、他の地域でもあり、どこの指導員も悩んでいる。
- ・ 実験終了後も、シール会が中心となり、ポイントを出すようにしている。シール会以外の商店についても、引き続き協力してもらえよう、現在募集をかけている。今のところ申し込みはないが、1 店については、参加しても良いといっている。こうした活動の広がりが、良い点だろう。
- ・ 飲食店の中でも、1 店については、地域通貨を利用してうまくやっている。固定客を、さらに取り込むことができたのだと思う。
- ・ 除雪のお礼に使用したり、家庭内（子供への駄賃のような形で）でポイントを使用したりすることはあった。
- ・ ボランティアについては、徐々に利用されていくと思う。地域通貨がボランティアのきっかけになればよい。
- ・ 資金の制約もあり、商工会でできることは限られている。理解してもらうように努力することが大事。これからさらに続けていけば、地域通貨は根付いてくると思う。
- ・ 裏書がネックだが、調査のこともあり、外すことができなかった。それが流通のネックだった。裏書を外せば商品券に近くなり、利用しやすくなると思う。
- ・ 女性の口コミが大事。主婦の参加が重要だと思う。
- ・ 経済のことは商工会が担当し、福祉やボランティアについては、社協、役場に担って欲しいが、現在の仕組みで社協や役場へ協力を求めることはできない。期間が 1 年間しかない。また、地域全体で取り組むとなると、地域の意見・理解の一致が必要となるが、

そのためには利害関係者の代表を集めた委員会の立ち上げなどが必要。そうした取り組みは、商工会が申請してもできない。

- ・ 行政とは、担当者同士で話はするが、それ以上に話は進まない。行政は、仕事が増えるのでやりたくないのではないか。また、社協と地域通貨の運営について話し合いをする時間、余力もない。社協も、協力するだけの時間や余力はないと思う。
- ・ ボランティア活動について、他の団体にどんどん一人歩きしてもらって構わないと思っている。
- ・ ポイントを買ってもらって、それをどう使ってもらっても良い。商工会が制約をかけているようなことはない。
- ・ 3つの協議会を設けたことで、より一層、進みづらくなった。委員会ごとに、扱うテーマは絞られているので、それぞれのポイントについて各委員会が習熟して欲しかった。しかし、実際には、事務局や商工会に依存し、一人歩きしてくれない。
- ・ 何もしなければ、より一層、町は停滞していたと思う。地域通貨に取り組んだ、ということが重要。
- ・ 補助金があろうがなかろうが、本流通は当然のことだと思う。そのためには、みんなに、やるかやらないのかを決断してもらわなければならない。私も、本格流通の形について、意見は出してきている。ポイントの仕組みをベースにすることになると思う。
- ・ 本格流通に向かって、今の段階で出資を仰いでもまとまらないと思う。現段階では、Aコープ、セイコーマートなどはポイントを出していない。それらにも参加して欲しい。
- ・ 購買が町外に流出していることについて、考えてもらえれば良いと思う。人口や金の流出の原因は個々人にある。業種や年齢を超えた街づくりが必要。そのための道具が地域通貨だと思う。
- ・ 町の発展についてのキーポイントは、みんながもっと苦しむことだと思う。あせりや責任を持つこと。人に押し付けないこと。
- ・ カード化、デザイン変更、ネーミング変更などについては、今年中にやってしまいたい。今年中に変更し、流通させたい。ただ、それは、シール会がどう動くかにかかっている。
- ・ 9月くらいをめどに、原案をたたき上げたい。冬には本流通したい。それも、みんながどうするかにかかっている。
- ・ 委員会での協議はしたくない。2回の実験で、訴えるための材料、進むための材料ができる。それを元に話を進めていきたい。委員会を作ると、会議の場では賛成といっても、実際には参加者の取り組みにばらつきが出る。時間や労力がかかってしまう。

(4)特定事業者4名（内、協議会委員3名　： 苫前地区2名、古丹別地区2名）

- ・ 苫前地区の商店はまとまっており、やるからには協力したいと思い、特定事業者になった。

- ・地域通貨によって売り上げに変化はなかった。お年寄り紙券を入手すること、ポイント券を紙券に取り替えることが面倒と感じているようだ。
- ・受け取った地域通貨は、極力商店街で使うようにしていた。全期間を通じて換金したのは 28 枚で、それ以外は使用した。
- ・お年寄りに使い方を説明するのが難しく、それがまた商店同士が一番の話題でもある。
- ・景気の悪い時期には地域通貨は要らない。気持ちの余裕が必要なのではないか。
- ・地域通貨はいつまで使えるかわからないが、ポイント券は有効期限がないので、紙券に取り替えたりせず、ポイント券のまま所持、使用していた方がいいと考えているようだ。
- ・ボランティアで使うには、500P という名称だと 500 円という“お金”という気持ちが強くなって使いづらいので、もっとやわらかい名称にすべき。
- ・回覧板で何度も説明が回ってきたが、活字ばかりでわかりづらい。また、苫前地区でも説明会などをすべきだ。
- ・商業部会に入っているので、特定事業者になった。特定事業者は、スタンプの会員と重なっているが、今回は飲食店など、スタンプに入っていない店も参加している。
- ・1 回目は、ニコニコシールを移行する、という形で進んでいた。元々シール会員ではなかったので参加しなかった。手続きが煩雑で、高校生のアルバイトには処理できない。ただ、2 回目では、地域通貨の仕組みや実態がわかってきた。また、商工会の方でも、スタンプは別にして、地域通貨の受け取りだけで構わない、という態度に変わってきた。そうなれば、商品券として地域通貨を扱うことができる。
- ・当初意欲的ではなかったが、何かやらなければと思っていたし、ニコニコシールに参加していたので、特定事業者となった。
- ・お店では贈呈品（日めくりカレンダー、タオル、ティッシュ）などを配っているが、これを地域通貨で代替しようとは思わなかった。（カレンダーは原価 600 円）
- ・受け取った地域通貨は今回あまり換金していない。家賃の支払いなどに使った。石油に使えなかったのも、不便だった。
- ・裏書しているので、お札などには使いにくい。
- ・売り上げへの変化はない。ただ、やらなければ、もっと下がっていたのかもしれない。
- ・セイコーマート、A コープで地域通貨が使えるようになったことはよかったと思う。消費者の利便性は上がったと思う。自分の店に持ってくる人も、前回よりは少なかったと思う。
- ・セイコーマートや A コープには独自のポイント制度があるので、スタンプを出すことは難しいのだと思う。
- ・500P が 200 枚くらい。売上に占める利用者の割合は非常に小さい（店全体では、月 1300 ～1500 万円程度の売上有るとのこと）。
- ・現金化したのは、半分くらい。残りは、自分のポケットマネーと交換し使っていた。

- ・売上への貢献を期待していたが、影響はほとんどなかった。正確には把握していないが、新しくお客が増えたということはなかったと思う。
- ・地域通貨を使ってみた、良い印象はない。名前の記入や枚数を数えることなど、わずらわしさだけが残った（厚いので、数えづらいとのこと）。
- ・ボランティア活動など、扱う量が大量にならない場合には良いのかもしれないが、そうした活動にお金を上げることに、町民はなじんでいない。
- ・（仮に、地域通貨をカード化したとすればどうか、という質問に対して、）使い勝手が良くなるのはよいと思う。ただ、使い勝手だけでなく、手数料などの問題もある。回収分を支払いにまわすときなど、大量に地域通貨を扱う場合には、手数料がかかると資金繰りに影響が出る恐れがある。
- ・利用者にとっては、通貨を購入する時点で2%のキックバックがあり、さらに買い物の際にはスタンプもつけてもらえるので、非常に便利だと思うが、扱う側にとっては負担が大きい。
- ・地域通貨を使う人は商工業の関係者などが主で、利用者は限られている。
- ・地域通貨の使用は、男女で違うと思う。男にはプライドがあり、使いづらい。主婦の方が抵抗なく使う。また、自分の娘を見てもそうだが、若い人は使わない。若い人は、ネットや通販で買い物をしている。
- ・お客さんの地域通貨での支払いは、第一回目の実験に比べて3倍になった。しかし、売り上げは大幅に激減した。地域通貨券での支払い者は増えている。
- ・女性客で圧倒的に使用頻度が高い。
- ・地域通貨券よりもポイント券を使うお客さんが多かった。
- ・シールと併用することができる（台紙に貼れる）ので、使いやすかったのではないかなと思う。
- ・地域通貨に関して、説明書をファイルにし、お店に常設し、案内をした。
- ・大規模店でも使用できますよと、推奨できたので、A コープ、セイコーマートでも使えることは、地元商店にとっても良かった。
- ・主にガソリンの支払いに使った。いつもは引き落としにしていたが、通貨券を使うようにした。
- ・一枚ずつでは（気分的に）出し辛いので、まとまって多額で使うようにした。
- ・一回目の時にはテレビを購入した。（ポイントも大量にもらうことができた。）

(5) 苫前町振興公社（苫前温泉「ふわっと」）1名

- ・第二次流通実験では、入浴料金への使用が可能になった。レストラン、売店でも使えるようになった。
- ・利用者の正確な人数はわからないが、全体で、500P 券 112 枚の利用があった。
- ・受け取った地域通貨のうち 36 枚は業者への支払い（電球などの雑貨品の購入）に使用

した。残りは換金した。

- ・ 町外の利用者も多いため、ポイントを「いらない」という人には渡していない。
- ・ シールを貼ることに手間がかかる。スピード感に欠ける。
- ・ ドラッグストアのポイントカードなどに比べると不便。
- ・ 商工会が、地域通貨を広めようと努力していることは感じる。しかし、効果がわかりにくい。
- ・ 会計時の作業なので、もっとスピーディーな仕組みにしないと、利用は落ちる。煩わしさや会計作業の増加などの点において不便。
- ・ よくわからない。地元の人が、地元で消費しているのかどうかが見えてこない。成果がわかりにくい。町民や事業者にアンケートを取ったときに、どのような結果が出るか。そうした声を聞くことが大事だろう。
- ・ 地域通貨の PR は行っていない。
- ・ 地域通貨については、カード化など、利便性を高める必要がある。買い物をする場所の少ない町で、地域通貨を利用するように言われても、地域通貨によほどの魅力がなければ、利用されないだろう。
- ・ 浜辺で、週一回、朝市をやるようなイベントがあっても良いのではないか。そこで地域通貨を使えるようにしてはどうか。
- ・ わずらわしくても、成果があるのならば、本格的に地域通貨を導入すべきだろう。成果がないのならば、やるべきではない。
- ・ 本格導入した際、その成功の判断基準は町の活性化、町内の盛り上がりにある。

(6)商工会青年部（町会議員）1 名

- ・ 青年部として地域通貨流通実験に対して特に関わっていない。地域通貨事業推進協議会には何名か参加しているが、参加者からのフィードバックは特にない。
- ・ これまでの地域通貨の実験は、点数にすると、一次実験は 50 点、二次実験は 30 点。一次実験の反省は、コミュニティのつながりを作る要素が少なかった。二次では本来そこに重点を置くべきであったが、実践できていなかった。既存のシステムであった、ニコニコシールと地域通貨のポイント券との区別がつかず、ポイント券としての認識が薄い。
- ・ コミュニティのつながりを作るためのポイント券という意識を持っている人がいない。商店の側も、消費者の側も。
- ・ 町が地域通貨事業に資金を供与しているが、町として地域通貨のかかわりがはっきりしない。
- ・ 悪しき官僚主義として、上からのトップダウンにまかせっきりで、指示待ちである。
- ・ 本流通よりもまずは、コミュニティや住民自治を醸成するために 3 次の流通実験をやるべきである。

- ・ 鍵になるのは、町内会の活動である。町内会の集まりは、年配の方々が集まって話し合っているだけ。もっと若い人たちが参加すればよい。
- ・ 町内会の活動費用のほとんどが募金に回ってしまっている。これをもっと町内会の活動にとって有効に活用できる（たとえば、町内のパトロールのお礼にポイント券とか）。

(7)社会福祉協議会 2 名

- ・ 苫前町では、企業（主に建設業）や学校が中心となり、除雪や空き缶集めなどの活動が行われているが、全体として、ボランティア活動は遅れていると思う。社協は、除雪や草取りのボランティアのコーディネートを行っている。
- ・ ボランティアセンターを設けて、登録をしてもらっているが、これは、コーディネートのためというわけではなく、ボランティア保険に加入するためには、センターへの登録が必要になるという事情があるため。
- ・ 今は、有償ボランティアはほとんど行われていない。高齢者が増えていることから（人口の約 3 割、500 世帯以上）、家政婦のような手伝い、役割が求められている。今後は、有償ボランティアも必要だと思う。
- ・ 無償でも、お礼などをあげれば、結局、高くつくということもあるだろう。割り切れる、という意味で地域通貨も良いと思う。
- ・ 1 回目から委員として参加していたが、1 回目の実験では、委員たちが地域通貨の仕組みや使い方をよく理解できていなかった。2 回目でも、商工会の委員の中で理解にばらつきがあり、ひとつになっていなかった。そのため、特に高齢者の理解が進まなかった。
- ・ 社協としては、2 回目の実験時、15 万円相当の地域通貨を買って、12 月 15 日に歳末見舞金の一部として 40 世帯以上に配った。
- ・ 協議会には参加していたが、商工会だけで話が進んでしまい、社協や他の団体はついて行けなかった。商工会が考えたプログラムで、ボランティアのことはあまり考慮されていない印象だった。
- ・ 計画の初期段階から、商工会と協力関係にあれば、より積極的に参加できたと思う。2 回目では協議会制度となったが、実質的には商工会が仕切っていた。
- ・ 高齢者は、仕組みや使い方がわからないと言っていた。2 回目は、セイコーマートや JA で使えたので、利用は広がったと思う。
- ・ ボランティア活動に地域通貨は使われていないと思う。ほとんどが商店での使用だった。ボランティアでは高齢者が中心だが、肝心の高齢者が地域通貨を理解していなかった。
- ・ 現状では、ただニコニコシールの姿を変えただけだと思われる。地元で金を落とす、という意味では必要なのかもしれない。ただ、高齢者による、有償ボランティア（家事など）への需要はある。きちんとした制度を確立すれば、そうしたボランティア活動に地域通貨は使えると思う。

- ・ 規模の小さなものならば、社協が中心になって地域通貨を導入するようなことはあるかもしれない。
- ・ 地域通貨を動かすためには、女性の関わりが必要。婦人会、老人会が深く入ってこないと動いてくれない。協議会には女性も入っていたが、深くは関わっていなかったと思う。
- ・ 地域通貨の成功、不成功を判断する基準は、経済のみでなく、高齢者事業も含めて、地域通貨を活用できればよいと思う。商工会は、経済ばかり強調するが、そうすると女性は動いてくれない。こうした小さな町では、高齢者事業などから地域通貨の活用を始めたほうが良いのではないか。
- ・ 商工会が中心になって地域通貨を主導するのが良いと思う。行政が中心になると、議会の手続きに手間がかかる。商工会なら、即決でできる。今回は、商工会の発想が柔軟ではなかった。
- ・ 高齢者事業団もボランティア活動をしている。その他、農協婦人部などの女性団体、図書館サポートが活動している。
- ・ お金の面で見ると、苫前地域は寄付などが集まりやすいが、古丹別地域はしぶい。苫前地域は漁師が多く、元々は、にしん漁で裕福だった。古丹別地域は林業が中心。苫前地域の方が協力的で、まとまりやすいと思う。地域通貨でも、苫前地域では商店が積極的にがんばっていた。
- ・ 地域通貨流通第二次実験による変化は基本的にはない。
- ・ フローチャート、イラストなどによる PR が必要でないか。
- ・ 体験モデルを広報に載せてみる必要性があるのではないか。
- ・ 成功している実例が欲しい。
- ・ 最終的に地域通貨がなくとも、良い関係作りが出来上がれば地域通貨はなくなるのではないか。
- ・ 高齢者の利用が必要
- ・ 学校の先生が子供と高齢者をつなぐ役目を果たせるのではないか。
- ・ 社会福祉協議会では、ボランティア研修もあるし、そういった活動をやろうと思えばできる。しかしながら、社会福祉協議会では金銭的余裕がない。
- ・ 苫前町の課題として、引きこもっているお年寄りを外出させてあげたい。サロンを開き、来てくれたお年寄りに券を配るなどの方法があるのではないか。
- ・ 健康ポイント券などのアイディアがある(ポイント券への連動)
- ・ 住民自身が積極的に関わっているとは思えない。
- ・ 苫前町には濃いコミュニティがある。親戚関係が強く、かたまりとして存在している。
- ・ 独居老人を外に出すのが課題。
- ・ 独居老人に電話してくれた方にポイント券を配る試み（社会福祉協議会でも、市民でもかまわない）

- ・羽幌町との連携が必要（広域流通の必要性）
- ・広報にポイント獲得者を表彰するコーナーを作る（グラフなどにするとよいのではないか）。町が見ているというメッセージを発信する
- ・「ポイントアスリート」のように、子供たちにポイントをためてどれだけのことが出来たのかということの研究させる試みも考えられる。
- ・苫前地区はいろいろなことに対してさっぱりとした性格。地域通貨をやるならば商店街などもあるので古丹別地区の方が成功しそう。

(8)保健士 1 名

- ・苫前町には自然の中で生活できるよさ（海も山も近い）がある。しかし、介護保険を利用して、一人暮らしをしている方々にとって、雪の除雪、交通の便の悪さ（買い物・病院への通院など）による影響で生活が困難。
- ・農業の後継者問題（後継者がいる場合といない場合に二分している。）
- ・漁師の後継者は、組合の中でホタテの養殖をやっているのは後継がいるが、個人経営のところは厳しい。新規に漁師を目指そうとする人も出てきている（若者やリストラになった人など）。
- ・お店で買い物に地域通貨を利用したことはあるが、ボランティアではない。
- ・ボランティア的な側面と商店での買い物に利用する側面と両方あると思うが、実際には認識できず、これまで利用してきたニコニコシールと地域通貨の違いがあまりない。
- ・これまでよく利用してきた店で地域通貨を使った。苫前に住んでいることから、苫前の商店中心で買い物するが古丹別までわざわざ買い物には行かない。むしろ、古丹別よりも羽幌に買い物に行く。
- ・これまで身近で地域通貨が話題になったことはない。
- ・職場の関係上、地域通貨についての情報を得る機会が多い。広報のビラや回覧も見ている。
- ・自分で地域通貨を持っていると情報に関心を持つと思う。
- ・近所や親戚同士での助け合いというものはすでに存在しているが、そこに地域通貨を導入するのは難しい。場所によっては導入可能な部分はあるかもしれないが、自分の職場などでは特にない。
- ・地域通貨を利用する可能性については、介護保険でまかなえない部分（介護度が低い方々など）について、どのように補完していくかを考えていく必要がある。

(9)ボランティア（図書室サポーター2 名、『ヤルンジャー』1 名）3 名

図書室サポーター

- ・図書室サポーターは 10 人前後で、子供を持った母親が多い。活動は子供（小・中学生が対象）中心。場所は、苫前と古丹別の図書室で月ごとに入れ替わりで行う。活動時間

は、3 時ごろから 2 時間ぐらいで、費用は実費 100 円程度。

- ・ 活動内容は本から得た知識を使って、いろいろな実験や食べ物を作ったりする。
- ・ 教える側は、ボランティアで図書室サポーターを中心に行い、母親がお手伝いする形。
- ・ もともと絵本はたくさん持っていて、絵本の普及活動をしたかった。転勤してきて町民との交流がなかなか持てず、同じ境遇の人のためにもなると思った。
- ・ サポーターは 6 人(うち一人は休養中)で皆女性。子供のいない方から 30 代の主婦まで。組織立った活動はしておらず、毎回当日に集まって何をするか決めている。
- ・ 会への参加者は定着しており毎回 5~7 組の参加がある。
- ・ 他のグループとの交流は個人的な付き合いのみ。管内の図書グループの研修会に参加できるので、何度か参加している（費用は負担してもらえる）。
- ・ 子供の遊び場が少ない。子供のスポーツクラブがあり、子供たちは学校が終わるとクラブ活動へ行く。そこでの交流はあるだろうが、それ以外に子供たちが集まる場所がない。
- ・ 個人的には、地域通貨というものがあることは知っているし、関心もある。しかし、図書室サポーターのあいだで、話題になることはない。
- ・ 苫前町地域通貨を本格的に導入するためには、町民が地域通貨に飛びつくかどうかがかギ。そのためにも、これまでつながらなかったモノやサービスがつながって、循環、回転していく仕組みを考えなければならない。今の現金決済より優れたものを構築していくことが理想である。これが成功するためのポイントである。
- ・ 今の商工会は地域通貨事業以外の仕事もあり、考え方が商業的であり、それしかないのかも知れない。商工会がもっと窓口を広げて、主体としてやりたい人々たちに積極的に参加できるような雰囲気をつくるべきである。
- ・ 地域のボランティア組織と地域通貨がうまく連携をとっていけるようにコーディネートできる人材や組織を取り入れるべき。地域通貨のメリットや将来性について考えている人々が主体となってやっていけばよい。地域を何とかしようと考えられる主婦層なども 3 割ぐらい入れたほうがよい。
- ・ 歴史的な違いがある。古丹別は木材で栄えていて、駅や役場があった。その後、苫前が漁業を中心に栄えるようになって、役場が移動した。その意味で、苫前と古丹別の機能が分散している。
- ・ 図書室サポーターのグループとしての予算がないので、地域通貨を導入しようがない。
- ・ 交流をする場所を利用する場合に地域通貨を利用するのはどうか。例えば、公民館などの公共施設に地域通貨を利用したらボランティア団体の活動がもっと伸びるのではないか。
- ・ 地域通貨を利用する枠組みをもっと幅広く考えることが必要。
- ・ 地域通貨で公共料金の支払いができれば、みんな支払うのではないか。
- ・ 地域通貨を積極的に利用することができるような枠組みを作る事が必要。

- ・地域通貨は利用範囲が限定されており、商品券のような印象をもってしまう。
- ・地域通貨の利用範囲を広めて、使い勝手が現金よりも便利になるようにすべきではないか。地域通貨を利用することでメリットをもたらすものにもっと利用すべき。地域の中で、地域通貨の流通を推進していく主体をどこにすべきなのかが難しい。地域通貨の発行もとを自治体などが中心となって実践してほしい。
- ・地域通貨実験について、回覧板で 2 回以上回ってきたが、使い道がないなと関心を持たなかった（買い物はほとんど町外で済ますため）。
- ・図書室サポーターの活動を通して地域通貨は受け取りたくない。（ボランティアなので）図書館からであれば受け取っても良い。
- ・親しい人との関係はギブアンドテイク。何かをしてもらえば、お返しに何かをあげるのではなく、今度何かをしてあげるという関係。

現役戦隊ヤルンジャー

- ・社協の方との飲みの席で、苦前の将来がこのままではいけないということから、何かをしようということで、社協の方の企画によって現役戦隊ヤルンジャーを結成した。
- ・活動内容は、たとえば、老人が園児と一緒に遠足、苦前町内の視察、中学校の授業参観など（詳細は社協だよりに年次活動計画表が掲載）。
- ・ヤルンジャーの活動はみなボランティアである。
- ・商業高校の入学者数が減少。高校の寮が空き家になっている。老人たちがお互い助け合って、何かできるようなグループ・ホームに活用したい。
- ・地域通貨についての話があまり出てこない。若い人が地域通貨を利用しているが、お年寄りには理解が仕組みがわからない。
- ・町全体に地域通貨の認識が広がれば効果があるかもしれないが、現段階ではまだそこまでいたっていない。
- ・自身では、取り入れることができたらいいと思う。たとえば、老人クラブの活動で、表彰状の字を書いてくれた人に対するお礼などに使いたい。
- ・もので喜ばれる場合もあるが、それが逆の場合（お金）もある。そのときに、地域通貨を利用すれば使い道はあるかもしれない。
- ・少子高齢化の時代で、除雪など手助けが必要な場合に、助け合いの精神が働く場合がある。社協にも依頼があるが、そのお礼はどうなっているのか不明である。これに、地域通貨を導入してもよいのではないか。
- ・第一回目の流通実験の際に表彰状の文字書きのお礼として渡したことがある。
- ・苦前町にとって、今後地域通貨を導入したほうがいいのか悪いのか、今のところ答えは出ていない。年数を重ねることによって、知識が芽生えてくるのでは。もう少しつなげてみればまちの活性化にもつながるのではないか。
- ・地域通貨の利用についての中身が熟知され、商工会の会員が足並みをそろえなければ

ならない。

- ・これまでのように、単に人を集めて説明するのではなく、説明する人々が地域の中に入って説明することが必要。説明会を聞いて、地域通貨を使ってみようという動きがない。
- ・町の予算を使っているのだから、もっと役場も積極的にかかわっていくべきだと思う。ヤルンジャーだけでなく、地域通貨券を利用できるような、組織ができていけばいい。
- ・地域通貨の事業を推進していく上で、キーパーソンになるのは高齢者。使い方をきちんと理解させる。あくまで地元に根ざしたものにす。広報の宣伝ももっとしっかりする。家族内でも教えあうようにする。

(10)町内会関係者 1 名

- ・ 苫前町町内会連合会は、ほとんど機能していない（事務局は役場）。
- ・ 古丹別の連合町内会は、古丹別の中にある 10 町内会の集まりである。仕事の内容は主に、役場の仕事の手伝いである。①役場の駐在員，②回覧板を配る，③イベント（桜祭り，古丹別神社祭り，ふるさと祭り）を主導する。
- ・ 現在の連合町内会は参加者が消極的であり，若者の参加も少ない。仕事が忙しく，会議に出席するのが困難。若者と高齢者のあいだの調整が難しい。
- ・ 商工会の人から地域通貨の話をしてもらったことはある。地域通貨について浸透していない。需要が芳しくない。関心を持ってもらっていないのではないか。
- ・ 仕事のお礼として地域通貨を利用できたらいののではないか。例えば，建設業などの仕事の給与の一部を地域通貨で支払いすれば，もっと需要が出てくるだろう。ボランティアで地域通貨を利用するには需要があまりないのでは。
- ・ 最初に，地域通貨の流通実験を導入するとき，うまくいかないと思った。説明を聞いた際に，地域通貨の利用についてなかなかアイディアがなくて，流通するのは難しいのではないか。
- ・ 奥さん方は，商店街の買い物に利用したことはあるが，自分ではない。
- ・ 苫前町の課題は，産業や工業の撤退によって，身近なところに働き口がなくなっている。
- ・ 人口が減少して，空き家などが増えている。これを改装して，定年になった人々を呼び込むことはしないのか。
- ・ 地域通貨を町の事業としてやりだしたことだから，成功しなきゃだめ。まちの活性化のために，雇用の創出を行うことが必要。

2 地域通貨に関するワークショップ

苫前町の地域通貨実験中に、苫前町民により、苫前町と地域通貨に関しての意見交換をする場を設けた。インタビューとは異なる手法であるが、苫前町の地域通貨実験を展開する上で重要と考えられるいくつかの点が出された。

2-1 概要

日時：2005 年 12 月 11 日（日）

時間：15:00-18:00

場所：苫前町公民館

方法：グループ・ワークショップ。5-6 人を 1 グループとして、各グループにファシリテーターを 1 名ずつ配置し、意見を出し合う方式。各グループで出された意見を発表。

内容：苫前町民の暮らしぶり、地域通貨利用方法の提案、地域通貨の名前のアイディア出しを行った。苫前町の暮らしの中で、社会的側面において地域通貨の果たす役割がいくつかあること、名前も苫前町に因んだ内容のものが提起された。

2-2 進行表

進行	担当
事前アンケート配付と回収	
はじめのことば	後藤（苫前町商工会）
挨拶	菊池（苫前町商工会会長）
イントロダクション	西部（北海道大学）
地域通貨事例紹介	栗田，吉田（北海道大学 院）
休憩	
グループメンバー紹介と趣旨説明	草郷（大阪大学）
グループディスカッション 自己紹介 苫前町の生活実感 地域通貨の使用に関するアイディア 地域通貨の名称に関するアイディア 発表	ファシリテーター グループ 1（栗田） グループ 2（中西） グループ 3（宮崎） グループ 4（吉地） グループ 5（吉田）
事後アンケート記入	
苫前町クイズ	吉田（北海道大学 院）
グループディスカッションまとめ	草郷（大阪大学）
総括	西部（北海道大学）
終わりの言葉	菊池（苫前町商工会会長）

（※敬称略）

2-3 グループディスカッション発表内容

グループ1（女性5名）

[苫前町のすばらしいところ]

- ・ お金がなくても暮らせます：一週間ぐらい農産物や魚介類をおすそ分けしていただくことが可能

[地域通貨の利用法]

- ・ カラオケ大会やミニバレー大会で利用されています：景品として

[名前]

- ・ 500 ポイント，500 ふわり（風のように），500 くまあらし，500 クリーン，500 くまちゃん

[ファシリテーターの補足コメント・感想]

苫前町での暮らし

- ・ 特に注目すべき意見がいくつか提出された。一つ目は，苫前町では，余った野菜や魚介類をお裾分けしてくれることが多いため，現金がなくともしばらく暮らせるということである。二つ目は，オリオン団地が作られて以来，そこに住んでいる，特に若い人との交流がなく，寂しいという意見である。また，それに拍車をかけるかのようなコンビニの登場により，一段と交流がなくなると主張されていた。

地域通貨のアイディア

- ・ カラオケ大会や，ミニバレー大会などの景品で地域通貨を利用出来ればいいという意見が出された。また，高齢者の方でもセイコーマートカードや JA カードの利用は簡単にしているのだから，地域通貨も電子化することは以外と簡単ですることが出来るのではないかという意見も出された。そして，地域通貨のアイディアではないのだが，私のグループの方々は，ボランティアの対価として地域通貨を手に入れることに自信がないという意見を持っていた。

地域通貨の名前について

- ・ クリーン，くまあらし，くまちゃん，ポイント，ふわり，ぽっぽちゃん，メロンちゃん，たこ・いか・かじか，などのアイディアが出された。

グループ2（女性5名）

[活用方法]

- ・ 職場で機材の使い方の助け合い（パソコン操作，コピー機）
- ・ 親子間での助け合い（アイロン，洗濯，）子供へのお手伝い券
- ・ お見舞いのお返し
- ・ 歳末たすけあいに利用する
- ・ 雪投げ，漬物，ボランティア→一律に〇〇Pと決めればよい

[システム：地域通貨を広げていくためのアイデア]

- ・ コミュニティの場（気軽に話せる場所・人）
- ・ 広報活動（病院のあいている壁，隣の町の病院）
- ・ 広報誌に「私は地域通貨券を〇〇〇煮使いました！」コーナー（特に子供）
- ・ 女性の集まる場所へ広報（若いお母さんたちへ）→子育て支援センター，PTA
- ・ 小物入れを作る（P 券を保管するために）→のりづけで老化防止！！
- ・ 農業・漁業・特定事業者へ

[名前]

- ・ ピーちゃん

[ファシリテーターの補足コメント・感想]

暮らし

- ・ 利点：安心して生活できる（町内の住民の顔がわかるので），住みやすい。
- ・ 欠点：日用品は町内や近郊で購入できるが，衣類（特に子供服）を取り扱う店が少なく，旭川まで足を運ばなければならない。
- ・ 高齢化が進んでおり，やって欲しいことはたくさんあるが，なかなかしてあげられない状況下にある。

地域通貨活用方法

- ・ ボランティア活動（除雪，職場内での業務→PC などの操作，漬物，家庭内での手伝い→親子間，嫁姑間）への報酬
- ・ 歳末たすけあい
- ・ 漁業，農業の人手としての作業への報酬
- ・ 〈普及方法として〉病院の壁を使用して PR，地域通貨について話合えるスペース作り，
- ・ PTA や子育て支援センターをターゲットに

地域通貨の名称

- ・ ピーちゃん，ピー券，ピー
- ・ すでに「2P」の呼び名が定着している，子供も呼びやすい名前で

町民に知らせたい活用事例

- ・ 地域性（高齢化，降雪）を考慮すると除雪作業（家の前，屋根の雪下ろし）を時給制で行う。（例： 〇分＝〇P 人材は登録制，個人間など）
- ・ 〈その他の上記のボランティア活動は，作業に対する価値をどうするか整理する必要があるのでは？農業・漁業の作業も魅力的だが，現状を把握してからか〉

感想

- ・ 参加者が現状として「商店のために実施しているクーポン的な印象を持っている」にも

かわらず、「人と人との間の活動に使いたい」とする意見が多く出されたことは大きな成果であり、住民が生活の中のニーズとして持っていることを確認し共有することができた。

- ・ 当グループは地域通貨に対して比較的関心の高い層であったが、「使用方法を説明する煩わしさ」、「人的な作業をどう価値で表すべきか」といった悩みも出された。今回出された活用方法の実現化と並んで、解決されるべき課題であろう。使用方法のマニュアル化や作業や労働への対価を指標化する必要があるかもしれない。
- ・ 今回のグループワークでは町人口の約1%の意見を集約できた。今後もそうした試みとして魅力的だ。ただ、関心の薄い層にどのように実施できるのかは疑問である。現段階では組織や団体（例えば、子育て支援センターの母親層、PTA、農業や漁業の組合、その他、人が集まるイベントなど）への啓蒙・普及活動の一つとして行うのが現実的であろう。参加者の関心度に合わせてワークショップや協議会による出前講座などの選択肢があってもいいのではないか。ワークショップの結果をいかに活用するかという点については、上述の病院の壁等の利用の他、細かな地域情報が掲載されているパブリシティ（具体的には、北海道新聞の地方版、日刊留萌、羽幌タイムス、町の広報誌、また、町内会活動に勢いがあるのであれば回覧板等）の利用なども考えられるかもしれない。将来的に地元の教員との連携がとれるのであれば、子から親への波及も狙って小学校の総合学習や商業高校の授業での実践やグループワークなどで取り上げてもらうこともできる。

グループ3（男性5名）

[活用方法]

- ・ 地域通貨利用案としてお年寄りの移動（車）→特に独居老人
- ・ 除雪作業

[名前]

- ・ ターコ、ベア、カゼ

[ファシリテーターの補足コメント・感想]

暮らし

- ・ 良いところは、暮らしが豊かなところである。顔見知りが多く、農産物や海産物など食糧も豊富である
- ・ 悪いところは、高齢化や過疎化の進行により、不安が増大。交通機関が不便であり、医療機関の整備についての問題もある。

地域通貨活用方法

- ・ 雪かき、あるいは、車による高齢者の送迎などに対する報酬
- ・ 既存の地域通貨のシステムに対する問題点（地域通貨の期限について）が挙げられて、今後の活用法に対する議論をあまり行うことができなかった。

地域通貨の名称

- ・カゼ，ベア，ターコ（苫前町の中で有名な風力発電，クマ，タコなどにちなんだ名前を考えた）。

感想

- ・地域通貨の活用法についての具体的な話がなかなかできなかった。普段から感じていた苫前町の暮らしについての問題点を述べるにとどまり，具体的にどうすればよいのか，あるいは地域通貨を活用したアイデアなどについての具体的な意見が乏しかった。
- ・苫前町民が真剣に苫前町の現状に向き合っていることは非常によく理解できたので，今後はいかにして地域通貨を利用した具体的な問題解決に向かうことができるかを考えていく必要がある。地域通貨を利用したアイデアの創出よりも，むしろ具体的に実行するときに，今回参加していただいた方々の力が頼もしいものとなると思う。

グループ 4（男性 5 名）

[活用方法]

- ・地域通貨流通の鍵は，ボランティア利用
- ・独居老人宅の除雪

[問題点]

- ・除雪してあげる人，除雪してもらいたい人をコーディネートする人や組織
- ・2P 券の利用が面倒：将来カード化も視野に入れて

[名前]

- ・ベヤ，Kuma，Gen

[ファシリテーターの補足コメント・感想]

参加者は全員 50 代後半以上であり，地域社会に対する認識もしっかりしているという印象を受けた。しかし，地域経済における悪循環を断ち切る方策としての地域通貨については懐疑的な参加者も多く，表面上は必死にその方法を模索しているようには見えなかった。地域通貨について批判的な参加者は，苫前町地域通貨が標榜しているボランティアと商業の併用が絵に描いた餅になっており，ボランティア利用を活性化する方法が必要ではないかという建設的な提言を行った。批判者が非協力的な態度を示さずに，協力的な姿勢を持っている点は，今後の地域通貨運営にとってプラスに働くと思われる。批判者が協力的姿勢を示している間に，地域通貨運営を軌道に乗せることが当面の大きな課題であろう。

地域通貨利用を拡大するにあたり，積極的な行政の支援を求める場合と，行政とは別個に活動していくべきだとの意見対立があるが，苫前町商工会サイドの意見は，行政の協力的なしに地域通貨運営や利用は不可能であるとの思いこみが強いと感じた。したがって，このような風土の下では，行政の協力を最初から仰いだ方が住民の結集した力を得やすいの

ではないかと感じた。それぞれの地域にあった地域通貨の活用方法を探るべきだと感じた。

グループ5（男性5名）

[活用方法]

- ・ スポーツ施設共通利用券として
- ・ カード化
- ・ 店の努力
- ・ ボランティア利用の環境づくり
- ・ 流雪溝

[名前]

- ・ ワット エンズ ベアー ベスト

[ファシリテーターの補足コメント・感想]

暮らし

- ・ 苫前町の暮らしぶりについてメンバーの多くは悲観的であった。町外の人に苫前町のどこを紹介しますかとの問いについて各メンバーに尋ねたが、なかなか答えが出てこなかった。一方、苫前町の抱えている問題については、高齢化・過疎という点については共通していた。

地域通貨活用アイディア

- ・ 地域通貨の使用アイディアについて町の体育施設の共通利用券として用いるべきと何度も主張されていた。他のアイディアをそれぞれのメンバーに聞いたところ、皆現行の地域通貨に流通期間制限があることと裏書するという煩雑さがあるので、使い道があまりないと言うに止まった。また、地域通貨の委員の方は私たちがすでにいろいろ話し合い、いろいろなアイディアを出してきた結果が今の状態だから、これ以上アイディアは出てこないと述べた。それでは、地域通貨に期間制限がなく、裏書の問題もクリアされたらどんなことに使えますかと尋ねたところ、雪かきの他にアイディアが出てこなかった。

感想

- ・ メンバー全員が地域通貨の委員になっているからか、現状の地域通貨がうまく行っていない原因を挙げるにとどまり、具体的な改善点や利用アイディアを出すところまで持っていけなかったことが残念だった。メンバー自身が地域通貨を受け取りこそすれ、支払いであまり利用していないことに原因があるとも思う。彼らの意見では、地域通貨の利用頻度の低さは流通期間に制限があることや裏書の煩雑さなどに原因があることになるが、町民全体が利用しないことを嘆く以前に、彼ら自身が積極的に使い、そこから問題点をすくい上げていく姿勢が切に必要であるように思う。

IV おわりに

最後に、アンケート、インタビューそれぞれを簡単にまとめて締めくくりにする。まずアンケートは、大きく分けて4つの側面から項目が作成されている。1つは地域通貨の利用に関する側面である。ここでは地域通貨の使用度、使用項目、および使用感などが項目としてある。これによって、地域通貨の使用が求められている分野や改善点などが浮かび上がる。続いて地域活動全般に関する側面である。そこでは地域に存在するさまざまな活動組織やその活動状況などを尋ねている。これについては、普段の地域活動の活発さ、参加状況などが、地域通貨のような運動への取り組みと相関があるかどうかについて、今後調べていこうと考えている。3つ目は商店街の側面である。ここでは、どのような種類の財、サービスが地元苫前町で消費され、その際どれほど苫前町以外に購買力が流れているのかという苫前町における消費実態を把握すると同時に、商店街の販売促進活動の問題点を見出すことで、地域通貨の流通促進へ向けた考察が可能となるのではないかと考えている。最後に生活と人とのつながりという側面である。苫前町で暮らしていく上での問題点の発見と、人々のつながりを把握することで、地域通貨のより有効な活用法を考察しているものと捉えている。

また、今回の調査では、役場や商工会、地域通貨協議会、特定事業者、商工会青年部、社会福祉協議会、町内会連合会だけではなく、保健士やボランティア団体にもインタビューをすることができた。これによって、第二次流通実験の実態を幅広く知ることができた。さらに、2回にわたる流通実験を通しての感想や意見・提案など多くの意見を聞くことができた。特徴的だったことは、長く地域通貨流通実験に主導的に関わってきた人であるほど流通実験に対する評価が高いということである。そこからは一定の達成感が伺えた。その一方で、福祉・ボランティアに関わる人々からは高い評価を得ることができていなかった。ボランティア団体によっては、地域通貨に関してほとんど知らないという状況であった。これは、2回にわたる流通実験の成果と課題を示すものとして位置づけられる。

本稿は、苫前町地域通貨第二次流通実験に関するアンケート（1回）、インタビュー（2回）およびワークショップ（1回）の結果をまとめたものである。「はじめに」で述べたように、私たちはすでに苫前町地域通貨の第一次と第二次流通実験について二つの報告書を公表してきた。第二次流通実験に関する報告書は、上記のアンケート、インタビューおよびワークショップの概要のみならず、地域通貨流通に関するネットワーク分析を含んでいるが、紙幅の制約から、インタビューとワークショップに関する全データ（詳細なヒアリング回答内容などの原資料）を掲載することはできなかったため、今後の研究のための準備作業としてそれらを記録し公表しておく次第である。

私たちは次のステップとして、2回の流通実験の比較分析を行いたいと考えている。そのためには、流通ネットワーク分析による定量分析とあわせて、アンケート・インタビューの結果を用いた定性分析が重要な役割を果たす。インタビューやワークショップの参加者

の発言や感想の中には、距離を置いた冷めた視線のものもあれば、事業をより発展させていこうという参加意識に基づく建設的で前向きなものもある。いずれも地域通貨参加者の意識や実態をよく表している。今後、地域通貨事業をよりよい方向へ発展させ、経済の活性化とコミュニティの再生を達成するためには、このような現実とどう向き合うかが問われるであろう。その意味で、本稿は重要なアイデアやヒントが隠された宝の山であり、今後こうした資料に関する考察を十分行う必要があるだろう。